2011 新潟

第51回 関東甲信越静地区造形教育研究大会 新潟大会

第28回 新潟県美術教育研究大会 中越大会

第44回 新潟県中越美術教育研究会 夏期研修会

大会テーマ

つくる喜び みる楽しみ かかわる・つながる造形教育

～『よさ』が広がる造形活動を求めて～

期日／平成23年8月4日（木）・5日（金）

主催／関東甲信越静地区連合造形教育連合
関東甲信越静地区造形教育研究大会新潟大会実行委員会

第51回 関東甲信越静地区造形教育研究大会 新潟大会
第28回 新潟県美術教育研究大会 中越大会
第44回 新潟県中越美術教育研究会 夏期研修会

2011 新潟

大会テーマ

つくる喜び　みる楽しみ　かかわる·つながる造形教育
～『よさ』が広がる造形活動を求めて～

期　日	平成23年8月4日(木)・5日(金)
会　場	新潟県長岡市 長岡リリックホール（開会行事・記念講演） 長岡造形大学（分科会・ワークショップ） 新潟県立近代美術館（都県代表者会議・美術館鑑賞研修・ワークショップ） 旧荷頃小学校体育館（廃校ワークショップ）
主　催	関東甲信越静地区造形教育連合 関東甲信越静地区造形教育研究大会新潟大会実行委員会
共　催	上越美術教育連盟　下越美術教育研究会 高等学校教育研究会美術・工芸、書道部会

Contents

あいさつ・祝辞 …… 1
会場及び日程 …… 4
全体会次第 …… 5
基 調 提 案 …… 6
記 念 講 演 …… 8
美術館研修・ワークショップ …… 9

分　科　会 …… 11
　分科会一覧 …… 12
　分科会提案　1 …… 14
　　2 …… 16
　　3 …… 19
　　4 …… 22
　　5 …… 25
　　6 …… 28
　　7 …… 31
　　8 …… 34
　　9 …… 37
　　10 …… 40
　　11 …… 43
　　12 …… 46

資　　料 …… 49
　大会のあゆみ …… 51
　大 会 規 約 …… 52
　第51回大会運営組織 …… 53
　編集後記・奥付 …… 54

協 賛 広 告 …… 55

あいさつ・祝辞

ごあいさつ

関東甲信越静地区
造形教育連合理事長
高　橋　香　苗

先日、ご縁があって、大船渡市立北小学校避難所でのワークショップに、ボランティアで参加をしました。避難所に着くまでは、ただ呆然と車から外を見るばかりでしたが、子ども達に出会って、造形美術教育の意味や価値について、繰り返し考えさせられました。

平成23年度は、小学校新学習指導要領の全面実施の年です。何よりもまず、よりよい授業で豊かな造形的な創造活動の時間を保障したい。この高度情報化社会の中で、ものにまみれ、身体を使い、試行錯誤しながら感じ考え、自分の価値や思いをつくり出す時間は、子どもの成長に大きな役割を果たしています。

数値化される学力の低下が今も注目されていますが、周りの世界を自分の身体と心で探索し、感じ、働きかけ、つくり出す豊かな時間の中で、子ども達に知恵の核が育まれていることは、忘れられがちです。

造形的な創造活動の中で子ども自身が、新たな知識と技能を発見し獲得することは、大人の知識や技術がただ伝えられるのとは、全く異なる体験です。子どもは自分の周りの世界の豊かさに気付き、好奇心と出会い、生きる楽しさやパワーを体験している……。

この大会に参加して、私たちは改めて造形美術教育の価値を、反芻することでしょう。大会で得られた成果や発見を広げながら、造形美術教育の意味と価値が、社会に広がっていくことを心から願っております。

最後になりましたが、本大会を開催するにあたって、ご尽力賜った多くの方々に、心より御礼申し上げます。

新潟大会の開催にあたって

関東甲信越静地区
造形教育研究大会新潟大会
大会会長
池　上　秀　敏

「第51回関東甲信越静地区造形教育研究大会」並びに「第28回新潟県美術教育研究大会」が、多くのご来賓の皆様はじめ、各都県から図画工作・美術の教育に携わる数多くの先生方を新潟県長岡市にお迎えして開催できますことは、造形教育発展のために、またとない機会であり、心から感謝申し上げます。

長岡市は、明治維新・大戦の戦禍から復興を遂げ、先の中越・中越沖地震に際しましても全国からの支援をいただき再三再四に渡る復興を成し遂げたことにお礼申し上げます。この度の東日本大震災に際しても人々の支援と英知により必ずや復興することを祈念しています。この時期、復興の街長岡市において本大会が新たな半世紀への第一歩を踏み出す意義も深く、造形教育研究のさらなる地平を切り開く大会になると信じます。

折しも、新学習指導要領本格実施の年であり、「生きる力」の育成の実現に向けた本質的・具体的な取組・実践が求められています。本大会テーマ「つくる喜び　みる楽しみ　かかわる・つながる造形教育　～『よさ』が広がる造形活動を求めて～」は、子ども一人一人が持っている素直な心を自然に表すことができる造形活動を進めたいという願いのもとに設定しました。造形教育は、多様なものや人やこととのかかわりの中に成り立ち、子ども自身がつくる喜びを味わい、みる楽しみを実感し、そのかかわりやつながりを深めることによって、より一層豊かなものになります。美しいものに感動し、友達のよさを認め、自分のよさが認められることによって、自己理解や他者理解が進み、自己肯定感を高めていきます。また、人のみならずものやことにかかわるよさも広がっていきます。教師はその役割をしっかり自覚し、効果的な手立てを講じることが造形教育の充実につながります。子ども本来の姿、つくる・みることの根本に立ち返って、感性を働かせ自らつくりだす喜びを味わう子どもの姿をしっかり思い描き、子どもも教師も元気が出る造形教育を目指し、実践交流・協議・ワークショップ等の活動が深まることを願っています。

最後になりましたが、本大会開催にあたり、ご指導いただきました文部科学省、新潟県教育委員会はじめ、関係教育諸団体、関ブロ役員・事務局の皆様に心よりお礼申し上げます。また、開催地として会場提供やご支援いただきました新潟県立近代美術館、長岡造形大学、長岡市、長岡市教育委員会はじめ、中越地区の図工・美術の先生方および関係者の皆様に心より感謝申し上げ、大会の挨拶といたします。

新潟大会の開催にあたって

関東甲信越静地区
造形教育研究大会新潟大会
実行委員長
柴　野　ひさ子

「第51回関東甲信越静地区造形教育研究大会」並びに「第28回新潟県美術教育研究大会中越大会」が、多くのご来賓の皆様をはじめ各都県から図工・美術教育に携わる大勢の先生方を長岡市にお迎えして開催できることは、新潟県の造形教育発展のためにまたとない機会であり、心から感謝いたします。

さて、未曾有の大震災から5か月。この時期に先の中越地震から復興した街・長岡市において本大会が新たな造形教育の半世紀への第一歩を踏み出すこととなりました。復興への営みをリードしていくのは子どもたちです。子どもは地域の未来と希望です。今こそ造形教育による、たくましく「生きる力」の育成の実現に向けた本質的・具体的な取組・実践が求められています。

本大会テーマ「つくる喜び みる楽しみ　かかわる・つながる造形教育～『よさ』が広がる造形活動を求めて～」には、子ども一人一人が持っている素直なこころを自然に表すことができる造形活動を進めたいとの願いが込められています。感性を働かせ自らつくりだす喜びを味わう子どもの姿を思い描き、子どもも教師も元気が出る造形教育です。本大会で、実践交流・ワークショップ等の活動が深まり、豊かなかかわりを育み造形教育の充実と発展につながっていくことを願います。

最後に、本大会の開催にあたり、ご指導いただいた文部科学省、新潟県、長岡市、三条市、小千谷市、見附市の各教育委員会をはじめ関ブロ事務局、関係教育諸団体の皆様に厚くお礼を申し上げます。また、開催地としてご理解いただいた新潟県立近代美術館、長岡市、長岡造形大学、そして、大変な苦労をしながらもご協力いただいた新潟県中越地区の幼保小中高校の図工・美術の先生方に重ねて深く感謝申し上げ大会の挨拶といたします。

祝　　辞

国立教育政策研究所
教育課程研究センター教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局
教育課程課教科調査官
岡　田　京　子

東日本大震災において被災された皆様へ、心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興をお祈り申し上げます。そして被災地支援活動を行うすべての皆様に敬意を表します。

本年度、小学校においては新学習指導要領が全面実施になりました。中学校においても移行期間の最終年度となり、高等学校の芸術においては、平成25年度から第１学年より実施となります。今後ますます、このような時だからこそ、目の前のひとりひとりの子どもに目を向け、子どもの学びの充実にご尽力頂けますようお願い申し上げます。

大会テーマ『つくる喜び みる楽しみ かかわる･つながる造形～『よさ』が広がる造形活動を求めて～』のもと、関東甲信越静地区造形教育研究大会新潟大会が開催されますことを、心からお祝い申し上げます。

今、授業の中の子どもの姿を読み解くことを中心に、授業の質を高めようとする取り組みが各地域で行われています。図画工作や美術などの造形活動では、子どもが様々な資質や能力を発揮させながら、作品や活動を生み出します。私たちがその過程に目を向けることは、評価の視点であると同時に、子どもの「よさ」を見付けることでもあります。

本大会は、材料･素材のよさ、友達や仲間等のよさ、家庭･地域･社会･環境等のよさ、美術文化のよさの４つの切り口で協議会をもち、それを、子どものよさにつなげ､「よさが認められ、さらに広がっていくこと」に光をあてています。これは､「子どもそれぞれのよさ」に目を向けていくことです。未来を担う一人一人の子どもへの、大きなエールになることは間違いありません。

そして、子どものよさを支えるのは、先生方のよさです。子どものよさを見付けることと共に、先生方それぞれのよさを発揮して頂き、造形教育をますます元気にしていきましょう。

最後になりましたが本大会を開催するにあたりまして、ご尽力いただきました関係各位の皆様に深く感謝申し上げますとともに、本大会のますますの発展とお集まりの皆様方のご活躍を祈念致しましてお祝いの言葉とさせていただきます。

祝　辞

新潟県教育委員会教育長
武　藤　克　己

はじめに、3月の東日本大震災及び長野県北部地震で被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げますとともに、新潟県教育委員会といたしましても市町村教育委員会や学校等の関係機関と連携し、子どもたち一人一人の健やかな成長を温かく支援してまいります。

さて、このたび、「第51回関東甲信越静地区造形教育研究大会新潟大会」並びに「第28回新潟県美術教育研究大会中越大会」が盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。

新しい学習指導要領は、小学校では今年度から、中学校では来年度から全面実施となる大きな節目を迎える中、これまでの理念を継承し、教育基本法改正等を踏まえ、子どもたちに育成すべき「生きる力」を更に強調しています。

新潟県教育委員会では、『生きる力』を構成する「確かな学力」の向上と「豊かな人間性と社会性」を育む教育を両輪に各種事業を立ち上げて学校教育を推進しております。中でも、「深めよう 絆 県民運動」では、学校・家庭・地域が連携して人と人とのかかわりをとおして絆を深め、児童生徒の社会性を育むことで、生徒指導上の諸問題の未然防止と解消を目指しています。この社会性とは、自己有用感や人間関係づくりの能力等ととらえており、本大会テーマとその趣旨にあります「つくる喜びとみる楽しみを人と人とのかかわりをとおして深め、『よさ』を認め合う造形活動によって培われる自己肯定感」と共通しています。まさに、造形教育の担う役割とその成果が、子どもたちの『生きる力』として実を結ぶことと大いに期待しております。この新潟県にお集まりの皆さんの提案やワークショップから、造形教育の有用性を子どもたち、教育関係者、保護者・地域社会へと発信され、また、関係各都県の造形教育の振興に実り多い機会としていただければ幸いです。

最後に、本大会を開催するにあたり、御尽力賜りました関係各都県の関係各位並びに、準備、運営にお取り組みいただいた皆様に心から感謝申し上げますとともに、本大会の御成功と御参加の皆様の御活躍を御祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝　辞

長岡市教育委員会教育長
加　藤　孝　博

「第51回関東甲信越静地区造形研究大会　新潟大会」が盛大に開催されますことをお慶び申し上げますとともに、各地からお越しの皆様を心より歓迎いたします。

長岡市では、子どもの夢を描く力と生き抜く自信をはぐくむため、「熱中！感動！夢づくり教育」を推進しています。本物に触れ感動する体験が、子どもの意欲や自信を高め、夢や希望をもったたくましい子どもの育ちにつながると考え、様々な事業を行っています。造形活動では、間伐材を使った木工に取り組む「ジョイフル里山木工塾」、市内の和紙工房と協力した「和紙作り」事業など、毎年、千人を超える児童が参加し本物に触れる体験をしています。また、書家や日本画家、声楽家等を学校に招いて、子どもが芸術家と交流しながら身近で芸術に触れたり、地域の人材や美術館等を活用して特色ある教育を行うなど、学校と地域が連携して子どもたちの感性や個性を育む美術活動を展開しています。“友だちとのつながり”、“地域とのつながり”を大切に心豊かな子どもたちを育成したいと考えています。

今回の大会テーマ「かかわる・つながる造形教育」には、「材料とかかわる」「友だちとつながる」「人や地域とかかわる」「美術文化とつながる」という意味があるとのことです。まさに私どもの行う「熱中！感動！夢づくり教育」と相通ずるものがあると感じています。

分科会では、熱い討議を通して、参加する先生方御自身の「かかわり」や「つながり」も一層深まるものと期待しています。そして、今大会の成果を生かし、子どもたちにつくる喜びや美しいものを見る楽しみ、友だちとつながり共感する心を育んでいただきたいと思います。

最後に、本研究大会を開催するにあたり、関東甲信越静地区造形教育連合会並びに準備・運営に関係する皆様方に心から感謝と敬意を示すとともに、本大会の成功と造形教育のますますの発展・充実を御祈念申し上げまして挨拶といたします。

日程及び会場

1日目 ……………………………………………… 8月4日（木）

10:30		13:00		14:40		19:00	
受付	都県代表者会議	昼食移動	全体会 開会行事・基調提案・指導講評 文部科学省調査官　岡田京子 様	移動	記念講演 講師 秋山　孝 様	移動	レセプション
長岡リリックホール							ホテルニューオータニ長岡
作品展示・協賛企業展示	県立近代美術館ギャラリー						

2日目 ……………………………………………… 8月5日（金）

10:30		13:00		
受付	分科会 「地域とのかかわり・素材とのかかわり・人とのかかわり」をテーマに	昼食移動	美術館研修	県立近代美術館
				秋山孝ポスター美術館 長岡
			ワークショップ	廃校ワークショップ　旧荷頃小学校
				造形大学ワークショップ　長岡造形大学
				美術館ワークショップ　県立近代美術館
長岡造形大学				
作品展示・協賛企業展示	長岡造形大学NIDホール			

2日目無料シャトルバス運行 ● 長岡駅→造形大→旧荷頃小学校→長岡駅

会場広域図 ………………………………………

❶ 長岡リリックホール（全体会）
長岡市千秋３丁目1356-6

❷ 県立近代美術館
（１日目展示・研修・ワークショップ）
長岡市千秋３丁目278-14

❸ 長岡造形大学
（分科会・２日目展示・ワークショップ）
長岡市千秋４丁目197

❹ ホテルニューオータニ長岡（レセプション）
長岡市台町２丁目８-35

❺ 秋山孝ポスター美術館長岡（研修）
長岡市宮内２-10-８

❻ 旧荷頃小学校（ワークショップ）
長岡市北荷頃4769

全体会次第

1　開会の言葉

新潟大会 実行委員長　柴　野　ひさ子

2　あいさつ

関東甲信越静地区造形教育連合理事長　高　橋　香　苗
新潟大会 大会会長　池　上　秀　敏

3　来賓祝辞

新潟県教育委員会教育長　武　藤　克　己　様
長岡市教育委員会教育長　加　藤　孝　博　様

4　来賓紹介

新潟大会 副実行委員長　小　林　学

5　基調提案

新潟大会 研究局長　中　嶋　均
副研究局長　丸　山　実

6　大会宣言

新潟大会 大会副会長　野　川　彰　夫

7　指導講評

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官　岡　田　京　子　様

8　記念講演

多摩美術大学 教授　秋　山　孝　様

お礼の言葉　大会副会長　堀　川　文　章

9　次期開催県あいさつ

埼玉県代表　笠　原　秀　夫

10　閉会の言葉

新潟大会 大会副会長　風　巻　洋

基調提案

つくる喜び　みる楽しみ　かかわる・つながる造形教育

～『よさ』が広がる造形活動を求めて～

はじめに

子どもたちは私たちと地域の未来であり希望です。

未曾有の大震災に見まわれた東日本。 いま、図工・美術教育に携わる私たちの真価が問われています。「たくましく、互いに認め合い、支え合って生きていける子どもたち」を育てる。すなわち「生きる力」を育む力が、いまこそ私たちに求められているのではないでしょうか。

1　大会テーマ設定の理由

造形活動は、多様な「もの」や「ひと」や「こと」とのかかわりの中に成り立ちます。そして、つくる喜びを味わい、みる楽しみを感じ、そのかかわり・つながりを深めることによって、より一層豊かなものになっていきます。

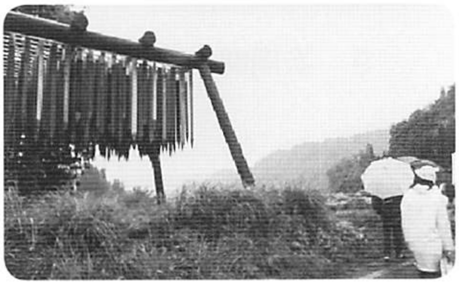
ではその「かかわり・つながり」をつくればそれでいきいきとした造形活動は引き出されるのでしょうか。同じことばかりを繰り返しやっていると新鮮さに欠け、魅力ある活動とならないことがあります。ところがほんの少し変えるだけでも見違えるようにいきいきとした活動になることもあります。

その違いについて考える一つの視点として「～『よさ』が広がる造形活動を求めて～」の副題を設けました。

造形活動を支える「かかわり」や「つながり」をつくり出している「材料・素材」「友達・仲間」「家庭・地域・社会・環境」「美術文化」といった子どもたちがかかわる対象の『よさ』に注目して、それらを生かし、広げる活動について考えようと、この副題を設けました。

そして、その『よさ』が広がる活動は、最終的には子どもたちの『よさ』につながり、地域の未来と希望である子どもたちを大きく育てていくであろうと考えました。

2　4つ分科会テーマについて



いきいきとした造形活動について考えていくため、４つの分科会テーマを設けました。

⑴ 材料・素材とのかかわりで『よさ』が広がる造形活動

子どもたちは造形活動の中で材料、素材、道具、技法、環境等とかかわりながら、つくる楽しさや喜びを味わいます。それら子どもたちがかかわる対象となるもののもつ『よさ』に着目し、そこからさらに『よさ』が広がるにはどうしたらよいのかについて検討します。

また、これは表現活動だけではありません。「みる楽しみを広げる活動」にも目を向け、身近な作品や仲間の『よさ』を認め、みる楽しみを広げる鑑賞活動についても検討します。

(2) **友達や仲間等とのかかわりで『よさ』が深まる造形活動**

つくる過程での、ふれあいや話し合いを通して友達や仲間とのかかわりが深まってゆく表現活動について検討します。造形活動の中での他者とのかかわりのもつ『よさ』に着目し検討します。

また、同時に友達や仲間とのかかわりで『よさ』が深まる鑑賞活動についても検討します。

(3) **家庭・地域・社会・環境等とのかかわりで『よさ』が広がる造形活動**

家庭・地域の『よさ』を生かし、連携を深めた造形活動をどう進めていけばよいかについて検討します。また、美術館や大学等の関係機関との連携を深め、その『よさ』を生かし、広げる造形活動について検討します。そして、社会や環境とのかかわりを深め、『よさ』が広がる造形活動はどうあったらよいかについても検討します。

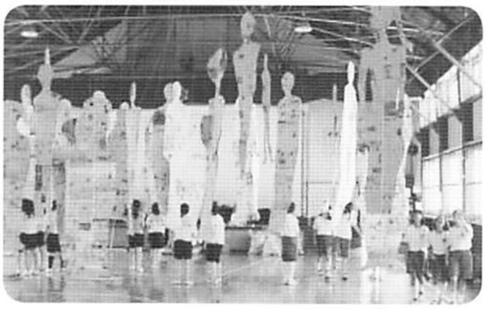
(4) **美術文化とのかかわりで『よさ』が広がる造形教育**

美術作品等とのかかわりを深め、『よさ』が広がる鑑賞活動はどうあればよいか検討します。

また、高等学校での授業における造形活動を深めていくために美術作品とのかかわりを深め、『よさ』が広がる造形活動についても検討します。

3　ワークショップ開設の理由

～なぜワークショップが必要だったのか～



「かかわる・つながる」という視点で造形教育を捉えようとするとき、実際にそこで体験し、実感できる仕掛けが欲しいと考えました。そして、3つのワークショップが設けられました。

廃校ワークショップは、廃校となった小学校の卒業生3900余名の人々を思い起こすインスタレーションに地域の子どもたちが中心となって挑みます。美術館ワークショップは、子どもたちと地域の美術館との交流から「美術館を紹介しよう」と子どもたちが挑戦します。美術館の企画展「いわさきちひろ展」では、小学生の「子ども学芸員」が中心となって、ギャラリートークも行います。造形大学ワークショップでは、鋳絵と染めという地域の伝統・産業にかかわる大学・高校の教員が実際に指導します。

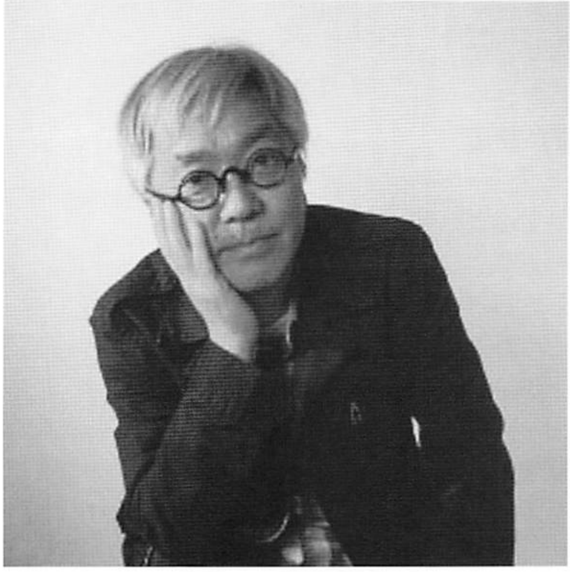
これら3つのワークショップを通して大会テーマ「つくる喜び　みる楽しみ　かかわる・つながる造形教育　～『よさ』が広がる造形活動を求めて～」を表現していければと考えています。

終わりに

東日本大震災の年に、今から7年前の中越地震の被災地で関東甲信越静造形教育研究大会が開催されることは何かのつながりがあるかのように思われます。中越地震の時、ここで多くのボランティアが集い、被災地の子どもたちのための美術展が開催されました。全村避難となった山古志の子どもたちが描いた教室風景の前で立ち止まり、ふるさとを失った喪失感に涙した人たちの姿が目に焼き付いています。

再びの大震災、子どもたち一人ひとりがもっている素直な心を自然に表すことができる喜びを、今しっかりとかみしめなければなりません。そして一人でも多くの子どもたちにその喜びを味わわせ、たくましく育っていってもらいたいと願っています。地域と私たちの未来と希望のためにも。

記念講演



演 題「ユーモア」

講 師 秋山　孝様（多摩美術大学教授）

— プロフィール —

1952年新潟県長岡市生まれ。多摩美術大学卒業。東京芸術大学大学院修了。1999年「秋山孝長岡コレクション」が設立される。2009年7月11日「秋山孝ポスター美術館長岡」が開館。

●受賞=1984年アフリカ自然保護ポスターデザインコンテスト・チュニジア大使館賞、1999年インド核実験反対のポスターでN.Y.フェスティバル・国連賞（アメリカ）、2007・'08 '09・'10 Graphis Poster Annual（アメリカ）で9つの金賞を受賞、他多数。

●著書に『キャラクター・コミュニケーション入門』（角川書店）『秋山孝ポスター作品集』（上海人民美術出版社）『Chinese Posters』（朝日新聞出版）他多数。

MEMO

美術館研修・ワークショップ

■ 美術館研修

県立近代美術館 ――――――――――― 長岡市千秋３丁目278−14

自然と調和した“緑に囲まれた美術館”です。所蔵作品は、近代日本美術との相互関係から、フランスのバルビゾン派やジャポニスム、ナビ派、ドイツ表現主義の美術を収集しています。

常設展では、「Animal! Animal! Animal!」、「ちひろの愛した画家」、「グラフィックデザイナー亀倉雄策」を鑑賞することができます。企画展では、「いわさきちひろ展〜子どものしあわせを願って」が開催されます。８月５日の１日限定で、小学生による「子ども学芸員」の解説もあります。

秋山孝ポスター美術館長岡 ――――――――――― 長岡市宮内２−10−８

「秋山孝ポスター美術館長岡」は、ビジュアル・コミュニケーションを主体とするポスターやイラストレーションを国際的に研究する美術館です。

当日は、第７回「秋山孝ポスター展Ⅲ」を鑑賞することができます。酒蔵や味噌・醤油蔵の多い醸造の町『摂田屋』のまちかどにある、世界でも類のないポスターを中心とした美術館です。近くには、日本一美しい鏝絵の「機那サフラン酒」の蔵、ツタの絡まる「吉乃川（極上吉乃川）」の酒蔵、「越のむらさき」の醤油蔵、長岡藩が北越戊辰戦争の始まりを告げた光福寺など歴史的建造物や文化に触れることもできます。

■ ワークショップ

廃校ワークショップ ――――――――――― 旧荷頃小学校／長岡市北荷頃4769

廃校を舞台としたインスタレーションのワークショップ　つなごう!荷頃小ヒストリー　つくろう!3900の物語

長岡市栃尾の荷頃地区は、美しい日本の中山間地の原風景を色濃く残す地域です。旧荷頃小学校は、平成17年３月の閉校記念式典をもって、明治６年私塾開学よりの132年の歴史を閉じ、現在、木造の体育館のみが残されております。

どの町の小学校もコミュニティーの中心であると思いますが、旧荷頃小も地域の方々のほとんどが卒業生であり、豪雪時の雪下ろしや施設・設備の整備を地域総出で行い、運動会や文化祭を楽しむ、といった具合でした。

今回のインスタレーションはそのような旧荷頃小の歴史や、送りだした卒業生3900余名の存在を感じられるようにあらわしていければと考えています。地域の子どもたちを中心にワークショップ形式で制作いたします。

造形大学ワークショップ ――――――――――― 長岡造形大学／長岡市千秋４丁目197

伝統・地域と織りなすカレッジワークショップ　〜鏝絵と染めもので地域発信〜

大学・関係機関との連携を深めた造形活動を行い、専門的な施設や人材とのつながりを深め、造形活動に生かし、そのよさを広げます。鏝絵を素材にしたワークショップと繊維を素材にした染色のワークショップを行います。このワークショップでは、新潟県の造形活動において長岡造形大学が情報を発信したり、地域からの情報を集約し再発信したりすることを再考する機会になれば、と考えています。

美術館ワークショップ ――――――――――― 県立近代美術館／長岡市千秋３丁目278−14

子どもがひもとく「トミオカホワイト」　〜子どもたちと地域の美術館との交流が生んだワークショップ〜

コシヒカリの里、南魚沼にひっそりとたたずむトミオカホワイト美術館。その美術館と地域の中学校の生徒との交流に取り組んできました。その美術館と中学生との交流をワークショップという形で子どもたちが表現します。

本年、長年親しまれてきたこのトミオカホワイト美術館は経営難により南魚沼市に運営が委ねられました。美術館を取り巻くこのような厳しい状況がある今、地元の中学生と美術館との交流がもつ意味について、子どもたちによる「ワークショップ」という形で、もう一度見つめ直してみたいと思います。

子どもたちがひもとく「トミオカホワイト」の世界をどうぞご堪能ください。

MEMO

分科会

分科会一覧

分科会テーマ	協議題・内容等	No.	提案		
材料・素材等とのかかわりで「よさ」が広がる造形活動	**材料・素材等のよさが広がる表現活動** 自然・材料・素材・道具・技法等のよさや持ち味・特性を生かし、そのよさが広がる表現活動はどうあったらよいか。	1	新潟(幼)	須田　智子	小千谷幼稚園
			新潟(幼)	田中　利子	小千谷市・わかば保育園
		2	神奈川(小)	白石　裕之	川崎市立下作延小学校
			静岡(小)	澤田　賢吾	沼津市立大岡南小学校
			新潟(小)	磯部　征尊	新潟市立亀田小学校
		3	山梨(中)	早川　健彦	笛吹市立御坂中学校
			群馬(中)	荒木　孝史	中之条町立中之条中学校
			新潟(中)	金沢　和明	上越市立頸城中学校
	よさを認め、みる楽しみを広げる鑑賞活動 友達や仲間の作品や身近な作品のよさを認め、みる楽しみが広がる鑑賞活動は、どうあったらよいか。	4	千葉(小)	北尾由紀子	千葉市立新宿小学校
			長野(小)	名取はるな	長野市立湯谷小学校
			新潟(小)	尾形　美穂	新潟市立亀田東小学校
友達・仲間等とのかかわりで「よさ」が深まる造形活動	**友達・仲間等とのかかわりでよさが深まる表現活動** つくる過程を大切にし、ふれあいや話し合い等、友達・仲間とのかかわりを深め、よさが広がる表現活動はどうあったらよいか。	5	埼玉(小)	大野　理恵	川島町立出丸小学校
			茨城(小)	山中　裕子	行方市立玉造小学校
			新潟(小)	梅澤　尚子	妙高市立新井小学校
		6	静岡(中)	杉坂　洋嗣	函南町立東中学校
			東京(中)	猪口　正和	中野区立第二中学校
			新潟(中)	齊京　　香	上越市立城東中学校
	友達や仲間等と共にみる楽しみが深まる鑑賞活動 言語活動を多様に取り入れ、友達・仲間と共にみる楽しみを深め、よさが広がる鑑賞活動はどうあったらよいか。	7	群馬(小)	岩﨑爾美子	前橋市立敷島小学校
			栃木(中)	中澤　誠一	足利市立協和中学校
			新潟(小)	堀　　和宏	見附市立名木野小学校
家庭・地域・社会・環境等とのかかわりで「よさ」が広がる造形活動	**家庭・地域とのかかわりを深め、よさが広がる造形活動** 家庭・地域のよさを生かし、連携を深めた造形活動の支援・環境構成はどうあったらよいか。	8	栃木(小)	大塚　智大	宇都宮大学教育学部附属小学校
			長野(中)	千原　　厚	長野市立柳町中学校
			新潟(小)	髙野　久昭	見附市立葛巻小学校
	美術館・大学等とのかかわりを深め、よさが広がる造形活動 大学・美術館等関係施設・機関との連携を深め、そのよさを生かし、広げる造形活動はどうあったらよいか。	9	千葉(中)	阿部　真紀	千葉市立川戸中学校
			神奈川(中)	小林　重之	横浜市立下瀬谷中学校
			新潟(小)	堀田　祐嗣	十日町市立西小学校
	社会・環境等とのかかわりを深め、よさが広がる造形活動 社会や環境を視野に入れたり、積極的に情報発信等をしたりするよさが広がる造形教育はどうあったらよいか。	10	東京(小)	石田　智春 内田佳代子	渋谷区立広尾小学校 目黒区立碑小学校
			茨城(中)	角谷　由美	水戸市立笠原中学校
			新潟(中)	瀬戸　優貴	燕市立燕北中学校
美術文化とのかかわりで「よさ」が広がる造形教育	**美術作品等とのかかわりを深め、よさが広がる造形活動** 日本や外国の美術作品や、暮らしの中の作品等に関心をもって行う鑑賞活動はどうあったらよいか。	11	山梨(小)	佐藤　清美	甲府市立甲運小学校
			埼玉(中)	根岸　由紀	深谷市立幡羅中学校
			新潟(中)	稲生　一徳	附属新潟中学校
	美術作品等とのかかわりを深め、よさが広がる造形活動 高等学校での授業における、表現活動や鑑賞活動をいかに深めていくか。	12	新潟(高)	北村　和則	中越高等学校
			新潟(高)	鈴木　　晃	豊栄高等学校
			新潟(高)	中條　由美	高田北城高等学校

※提案発表原稿には、実践時に在籍の学校名が記載されている場合があります。

	助　言	司　会	記　録
	若井　陽子　元小学校教諭	船岡　芳英　小千谷幼稚園	大久保彰彦　小千谷幼稚園
	岡部　養一　川崎市立稗原小学校	紺野　清美　川崎市立藤崎小学校	来島　千愛　川崎市立平小学校
	鈴木　正伸　沼津市立沢田小学校	高木　晃久　沼津市立愛鷹小学校	仁科　恵理　沼津市立金岡小学校
	石塚　崇　聖籠町立蓮野小学校	大矢　隆　新潟市立葛塚小学校	佐久間郁子　新潟市立上所小学校
	平出　章　中央市立三村小学校	塚原　英樹　甲斐市立玉幡中学校	髙橋　光明　甲斐市立敷島中学校
	田中　賢治　館林市立多々良中学校	木暮　克昌　群馬大学教育学部附属中学校	小野田一子　太田市立尾島中学校
	細井　一貞　柏崎市立南鯖石小学校	上　雅次　上越市立城北中学校	賀耒　綾子　上越市立直江津東中学校
	手島　惠三　千葉市立宮崎小学校	上野　仁子　千葉市立都賀小学校	関屋　敦子　千葉市立幕張南小学校
	西澤　剛　佐久穂町立佐久西小学校	原　隆文　佐久市立野沢小学校	原山　裕司　長野市立西条小学校
	池上　勉　新潟市立金津小学校	渡辺富美子　新潟市立上所小学校	南　伸裕　新潟市立山の下小学校
	上原　馨　坂戸市立勝呂小学校	池田恵理子　東松山市立市の川小学校	二木　洋明　小川町立東中学校
	片岡　満　行方市立麻生第一中学校	堀田　好昭　潮来市立潮来第二中学校	髙橋いみ子　行方市立北浦中学校
	室田　正子　上越市立諏訪小学校	飯田美輝夫　糸魚川市立青海小学校	飯野　浩枝　上越市立南本町小学校
	鈴木　浩二　伊豆の国市立韮山南小学校	城所　裕　伊豆の国市立大仁中学校	羽田　直子　伊豆の国市立韮山南小学校
	殿村　靖廣　葛飾区立上平井中学校	土田　貢司　東久留米市立大門中学校	佐藤真理子　大田区立南六郷中学校
	宮崎　俊英　上越市立八千浦中学校	梨本　高志　上越市立城西中学校	堀　真由実　糸魚川市立青海中学校
	内藤　武志　高崎市立中川小学校	飯塚　淑光　藤岡市立東中学校	布目雄一郎　玉村町立玉村中学校
	青木　孝浩　栃木県教育委員会学校教育課	出山　秀明　足利市立毛野中学校	小林　優子　足利市立坂西中学校
	松井　謙太　新発田市立赤谷小学校	宇賀田和雄　新発田市立竹俣小学校	清水　克朗　長岡市立上通小学校
	若林　直行　栃木県総合教育センター	中里　祐子　宇都宮市立宝木小学校	森元　克之　宇都宮市立姿川第一小学校
	大沼田元幸　松本市立波田中学校	五明　良治　長野市立中条中学校	大内奈美子　上松町立上松中学校
	外山　和弘　長岡市立関原中学校	青木　善治　阿賀野市立笹岡小学校	伊藤　瑞恵　長岡市立川口小学校
	山根　佳奈　千葉市美術館	石塚　直樹　千葉市立末広中学校	古川　明海　千葉市立白井中学校
	石川　代治　横浜市立笹下中学校	金阿彌　勉　横浜市立いずみ野中学校	本江伊智郎　横浜市立並木中学校
	野村　宏毅　新潟県立近代美術館	水谷　徹平　上越教育大学附属小学校	五十嵐　実　長岡市立黒条小学校
	辻　政博　前都図研会長	上野千絵子　目黒区立向原小学校	古宮由衣子　大田区立南蒲小学校
	髙橋　文子　茨城大学教育学部附属中学校	横須賀邦男　水戸市立城東小学校	安島　可子　水戸市立笠原小学校
	目黒　進　燕市立吉田中学校	田中　大志　三条市立第二中学校	南雲　学　県立小出特別支援学校
	鷹野　晃　北杜市立須玉中学校	窪田　眞敏　甲府市立城南中学校	深澤　勉　甲府市立南中学校
	福島　淳　寄居町立寄居中学校	中澤　信宏　深谷市立岡部中学校	清水　裕子　深谷市立藤沢中学校
	浅井　俊一　新潟県立近代美術館	荒川　洋子　新潟市立赤塚中学校	田代　豪　新潟市立早通中学校
	風巻　洋　阿賀黎明高等学校	田中　幸男　長岡明徳高等学校	森山　みさ　小出高等学校

身近な素材の新たな「よさ」を味わう活動

新潟県　小千谷市小千谷幼稚園
須　田　智　子

■ 提案・発表の内容の要旨

４月に入園してきた３歳児の子どもたちにとっては、見るもの触れるものひとつひとつがはじめて出会うもので、そのひとつひとつに感動や発見があったのではないかと思う。

今までの造形活動の中で、いろいろな素材を経験してきた子どもたちであるが、今回は身近にある素材である“新聞紙”を通して新たな楽しさや驚きを感じてほしいと思い、それにはどんな活動が一番適当なのかと考えていた。

ちょうどその頃は豆まきが近づいていた頃で、クラスでも豆まきの話や鬼の話が出ていた。子どもたちは楽しみな様子でもあり、園での豆まきという未知なものへの不安な様子でもあった。中でも数名の子どもたちは「いつ鬼さんくるの？」ととても心配そうであった。そんな子どもたちの様子を見ながら、少しでも豆まきや鬼に対して「よし!!」という前向きな気持ちを持ってほしいと思っていたところ、一人の男の子が「ももたろうになって鬼をやっつければいいんだよ！」と提案してくれた。少し前にももたろうの人形劇を見たことがあったからかも知れない。その子の一言にクラスの子どもたちは「いいね～！」と気分が盛り上がっていった。

そこで、ももたろうのきびだんご作りに“新聞紙”を取り入れることにした。「ももたろうごっこ」のその日はまずはじめに、ももたろうのこしひも作りからはじめた。ベルトができると子どもたちの気持ちも高まり少しずつももたろうになりきっている様子が見られた。次はいよいよきびだんご作り！普段よく見たことのある新聞紙だけれど、その日は本来の目的とはまったく違ってそれをクチャクチャにする。子どもたちはクチャクチャにするのがとても新鮮で楽しさを感じているようだった。勢いよくまるめる子や丁寧にまるめていく子、でもどの子も新聞紙に触れ、自分の手でクチャクチャにすることを、楽しんでいるようだった。きびだんごができ、それをそれぞれ巾着袋に入れ、ももたろうに変身！ももたろうになりきっていることで、普段は担任が鬼の真似をしただけで顔がくもっていた子も豆をぶつけて、楽しそうに鬼退治をしていた。

身の周りでよく目にしている新聞紙ではあるが、それをクチャクチャにすることはあまり経験しないことである。しかし見方を変えると新聞紙もとてもよい造形活動の素材になると考え、この活動をえらんでみた。

豆をぶつける子どもたち

■ 成果と課題

⑴ 成　果

◉　普段はクチャクチャにすることのない新聞をクチャクチャにすることで新たな感触を感じたり、クチャクチャにすること自体を楽しんだりしていた。一枚目はおそるおそるやっていた子も二枚目、三枚目になると勢いよくまるめ、紙の感触を味わうとともに勢いよくまるめる快さも感じているようだった。

◉　新聞紙をまとめたところをセロテープでとめるという作業が入ると自然に指先へと気持ちを集中することもできた。楽しんで作っているので、普段は細かい作業が苦手な子も思ったほど表情がくもることなく、“つくるぞ！”という意欲的な表情を見せていた。

◉　上記の二つの成果は、ももたろうになりきっていく子どもたちの気持ちがあったので、より子どもたちの姿として表れたのでは思う。そして、自分で作った小道具ができていくことで、なりきっていく気持ちもよりふくらんでいったのではないかと思う。活動の後半は自分で作ったものを使ってなりきってあそぶというところまで進んでいったが子どもたちの表情が前向きで生き生きとしていて、クラス全体の勢いを感じた。

⑵ 課　題

◉　この日の活動内容としてみると、やることが多すぎて時間が予定よりも長びいてしまった。ベルト作りは前日などにやっていた方が、この日の活動全体に余裕が持てたのかも知れないと思う。

◉　保育者はももたろうを新聞紙の使えるきびだんごに結びつけたが、子どもたちの中には「ももたろう＝刀」と想像する子がいた。保育者の思いが先走りしすぎてしまったのではないかと反省が残る。

分科会
1

２歳児の発達をふまえた造形活動を考える

新潟県　小千谷市立わかば保育園
田　中　利　子

■ 提案発表の内容の要旨

２足歩行から排泄の自立、そして言語が発達し創造活動へとつながっていく子どもの成長過程のなかで、２歳児は、歩く・走る・跳ぶ等自分の身体を思うように動かすことが出来るようになり、身体を使ったあそびを繰り返し行う。その動きを十分楽しみながら、人や物との関わりを広げていく。また、紙をちぎる・破る・貼る・なぐり描きを喜んでするようになり、集中して遊べるようになる。指先の機能の発達により、できることが増え様々なことに意欲がでてくる。

これらをふまえ、２歳児の生活の中で造形活動を考える。

保育園の春は、新しい生活環境に泣いたり、不安を抱えている様子が多く見られる。徐々に慣れてきた頃、子ども達の目に触れたものが「こいのぼり」であり、風に泳ぐこいのぼりを喜んで見ながら泣き止んでいる光景を目にする。

そこで、保育士が用意した画用紙に、思いきりなぐり描きをしたものを、「こいのぼり」という作品に仕上げ階段の壁に飾ると、「やねよりたかいこいのぼり～」と、歌いながら階段の乗降を日常の中で繰り返す。

夏には園生活にも慣れ、ダイナミックな遊びに興味が向くようになる。そして、大好きな水を使った遊びが始まり楽しむようになると、水の動きや音に興味を持ったため、ローラーを用意する。自由にローラーをころがし水を表現して遊び、保育士が用意した魚型に色を塗り組み合わせて飾る。

秋になると、遠足や散歩を経験し自然に触れる機会が多くなる。拾ってきたどんぐりや葉っぱを使いごっこ遊びを楽しむ中で、自分から友達へ関わりが広がる。また、散歩でみてきた「きのこを作ってみよう」という働きかけで、スタンプ遊びで作ったきのこが運動会の道具になり、行事への参加意欲を促すきっかけとなる。

冬には、多くの２歳児が３歳になり、排泄も自立し身の回りのことを自分でしようとする気持ちが育つ。

行事等を通し異年齢児との交流も増える。大きい子が雪遊びをしている様子を見て、「自分たちも雪だるまを作りたい」という興味がわく。保育士と一緒に雪だるまを作り、絵の具で顔を描いたりして遊ぶ。この経験を基に、画用紙に雪だるまを描き、タンポで雪を降らせ作品を作り階段の壁に飾る。

■ 成果と課題

(1) 成　果

◉　当園は２歳児の保育室が２階にあり、階段の乗降が生活に必要になってくる。そこで、安全にゆっくりと乗降することを目的に、階段の壁や踊り場に作品を展示することにしたが、ねらい通り自分の作品を見つけ、指差して喜んで見ながらゆっくり乗降している。

◉　繰り返すうちに、覚えていた友達の作品を見つけ、友達の名前を呼ぶようになる。

◉　低年齢児の送迎は、保育室まで行ってもらっているが、その際、親子で見ることにより会話が弾むようになる。

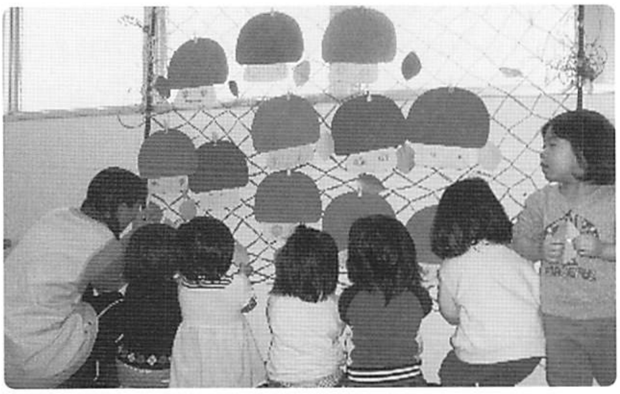
◉　展示を繰り返すことで、次への期待が膨らむようになり、造形活動に楽しさが増す。

◉　展示は、季節感のあるものを主に飾ったので、保育士との生活や会話を通し、春夏秋冬（四季）に関心がもてた。

(2) 課　題

◉　２歳児の造形活動は、様々な材料を使い遊びの中で楽しんだことを、保育士がどのようにして作品に仕上げ、子ども達が楽しめるように環境構成するか。

◉　発達を助長していくために、手先・指先や身体全体を使ったどのような活動を計画していくか。



分科会 2

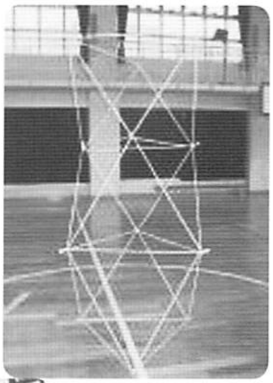
材料・素材等とのかかわりで「よさ」が広がる造形活動

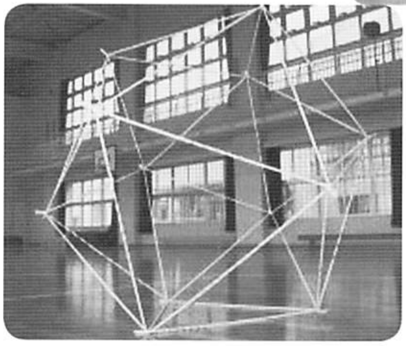
触れ合いが素材の「よさ」を生みだす実践

神奈川県　川崎市立下作延小学校
白 石 裕 之

■ 提案発表内容の要旨

今回は、身近にある新聞紙を題材に取り上げた。今までも低学年では、ちぎったり、丸めたり、中学年では、包んだり、つなげたりと新聞紙を図工の材料として扱ってきている。折る、たたむ、ちぎる、重ねるなどの活動の中で、細く丸めることで一枚の新聞紙が強度のある辺となり、芯材と変身する。芯材を組み合わせることで平面図形ができ、平面図形を組み合わせることで立体空間を生み出せることに気づく。実際の建築物では、鉄骨や木材を中心とした剛結合を用いてRhamen（ラーメン）構造を利用し建築物が存在している。ラーメンとは、ドイツ語の「Rhamen」（額縁）に由来し、日本語では「骨組み」を表す。





本題材では、このRhamen構造に着目し、新聞紙を細く巻いた中空の芯材（以下Rhamenの素）を用いて、未体験の大きな空間を遊びながら生み出していく。

材料は新聞紙とマスキングテープのみである。新聞紙という薄くて柔らかな材料が、紙テープと出会うと意外な姿に変身する。子どもが素材のシンプルさや、生み出された作品の美しさ、そのスケールの大きさという新たな感動に出会うことを願い取り上げた。

1時間目に新聞紙を触りながら細く丸め棒状にすることで固く強く成ることを発見する。そのRhamenのもとを3本つなげると三角形、6本つなげると正四面体となり、安定した小空間に変身することを見つける。更に発展し4本で四角形を作るが非常に弱い、しかし12本組み合わせると正八面体ができあがりとても強い構造になる。

2時間目は正八面体を上下に組み合わせることができることをを知り、高く積み上げることが可能になった。大きなタワーも作れそうと子ども達がイメージしだす。しかしその為にはかなりのRhamenの素を作る必要があることに気づき一人でなくクラス全員が協力しだした。Rhamenの素を作りながら子ども達がどんなことをしたいのか相談し始めた。クラスで1000本以上のRhamenの素を作り上げた。

3・4時間目は個人が組み合わせたい形を描きながら活動が始まる。途中から友だちとの共同作業が始まる。その方が大きく、高く作れることが分かったからだ。横方向に広がるチーム、縦方向に広がるチーム、強大な構造を作り作品の中に自分達が入って楽しむチームなどが現れた。一人一人が自分らしいイメージを持ち活動しながら仲間と相談しより大きなものへと発展させていった。

■ 成果と課題

(1) 成　果

◉ たっぷりと新聞紙に関わることで材料の「よさ」を発見できた。子どもたちは、あんなに薄い直ぐに破れる新聞紙が、こんなに固い芯材へ変身することに驚き、更に組み合わせる事で体育館の天井にまで届くような超巨大造形物を自らの手で作る喜びを味わい造形活動を行っていた。

◉ 一人一人の個性が尊重されながら互いの気持ちも大切にする工夫。Rhamenを組合せ自由に表現できる良さと、仲間と相談し協力することで短時間に巨大な造形物をつくることを楽しんでいた。

(2) 課　題

◉ 制作時に巨大な空間が必要になる。小学校の場合ダイナミックな活動をするために体育館が必要になる。完成後鑑賞を行うが、長期間の作品を保存することが難しい。

◉ 湿気と強度の釣り合いが難しい。Rhamenは連結するとかなり大きな物が作ることが可能である。しかし、湿気が多い場合強度が落ちて作品が壊れてしまう。

◉ 子どもの背丈より大きくなった場合、安全に活動できる場の設定が必要になる。体育館の構造にもよるが舞台やデッキを利用できるとよい。

分科会 2

材料や場所の特徴を生かした造形遊び

静岡県　沼津市立大岡南小学校
澤　田　賢　吾

■ 提案発表の内容

１学期に、４年生の子どもを対象に「傘を入れるビニル袋」を使った造形遊びを行った。材料を提示し「この袋を使って何かできないかな。」と投げかけると、子どもたちは「空気を入れて棒にする」「絵をかいてみる」など発想をした。活動では「空気を入れる」「切ってつなげる」「色をつける」「水を入れる」「空気を入れて飛ばす」「友達の袋とつなげる」と、いろいろな広がりを見せた。

子どもたちは、材料の特徴をとらえ、友達とかかわりながら造形活動を行った。そこで、材料の他にも場所とかかわる中で新しい形をつくったり発想したりすることができる造形遊びとして、本題材を設定した。

グラウンドの西側に、アスレチックがある。木製の遊具やジャングルジムがあり、いろいろな木が生えている。子どもたちはそこで鬼ごっこなどをして遊んでいる。今回は、そのアスレチック広場を舞台に活動を行った。

アスレチックに子どもを集め、活動の内容を説明した。「今日は、この場所をもっと素敵に変身させましょう。」材料として、ビニルシート、スズランテープ、ガムテープ、ビニルテープ、傘用ビニル袋を提示した。用具として、油性ペン、接着剤、セロハンテープを用意した。そのほかに、子どもたちは絵の具セットとはさみを用意し自由に使えるようにした。

はじめは遠慮がちに材料を手にしていた子どもたちは、次第にスズランテープを大胆に伸ばしたり、友達と協力して活動したり深まっていった。

大きなビニルシートを使って、木を囲むようにしたり、雲梯を囲んで家にしたりと自分たちの基地をつくる子どもたちが増えていった。囲んだビニルシートにスズランテープやビニルテープを付けて飾り付けをする子どももたちも出てきた。子どもたちは、相談し合ったり協力し合ったりして活動を深めていった。

■ 成果と課題

(1) 成　果

◉材料の特徴を生かした活動

テープの色彩やビニルシートの透明感などを生かした活動が多く見られた。活動が進むにつれ、自分の活動にテーマを決め、テープの色にこだわる子どもも出てきた。

◉場所の特徴を生かした活動

自分たちのお気に入りの場所を見つけて、それぞれが活動できた。中には植え込みを利用して活動する子どももいた。

◉活動のわかりやすさ

テープを使って活動するという単純な作業だったため、技術的に低い子どもたちも進んで活動することができた。また、普段はおとなしい子どもがリーダーとなり、友達に指示する姿が見られた。

◉発想や構想の広がり

子どもたちが活動を進めるたびに場所の様子が変わっていくので、子どもたちが次々と発想をふくらめ易かった。

(2) 課　題

◉自然材の活用の少なさ

屋外での活動だったため、葉や枝などの活用を予想していたが、自然材を使う子どもたちが少なかった。色彩豊かなテープ類や普段使ったことのない大きなビニルテープに目がいったことと、落ち葉が予想以上に少なかったことが原因だと考えられる。

◉協同作業を好まない子ども

ほとんどの子どもが友達と協力しながら発想を高めていく中で、一人で活動している子どもがいた。発想の高まりがどうだっただろうか。

ゴムを用いた動きから発想を広げさせる表現活動

新潟県　新潟大学教育学部附属新潟小学校
磯　部　征　尊

■ 提案発表の内容の要旨

従来の「動くおもちゃづくり」の題材では、ストローを使って上下に動くおもちゃづくりや、針金を使ってクランク機構を基にした題材などが行われてきた。その際、教師は、「この材料を使うと、こんな楽しい動くおもちゃができます。みなさんもつくりましょう」というように、完成作品を提示し、自由につくらせることがある。しかし、子どもは、教師の完成作品に類似した作品をつくってしまう。なぜなら、子どもは、動きの面白さに気付いていないからである。そこで、教師用の試作を提示し、様々に動く様子を子どもに試させる。子どもは、「これは、クルクル回っているよ。手や足みたいで面白いね」「あれは、フワフワした動きだよ。おばけみたいで楽しいね」など、色々な動きから発想（以下、見立て）を広げる。そして、見立てたものの中から表したいものを見付けた子どもは、教師の完成作品とは異なる表したいものをつくる。

本題材では、ゴムと身近な材料とを用いることで、動きからの見立てを工夫してつくる子どもを目指す。「動きからの見立てを工夫してつくる子ども」とは、動きから見立てたことを基に、表したいことを見付けると共に、その表したいことを表すために、形・色・動きの観点から行為（材料を付ける・飾りを付ける・動きを変える、など）を選んだり、納得するまでつくり直したりしていく子どものことである。

１～２時間目は、教師用の試作（１）（牛乳パックに輪ゴムを付けたもの）を提示し、上下に動かして遊ばせる。遊び終わった子どもに、動く様子に当てはまる擬態語を問う。子どもは、「ビヨンビヨンだった。水玉風船に見えたから」など、動く様子を何かに見立てた。このような状態の子どもに、自分たちよりも背の高い場所や低い場所など、ぶら下げて遊ぶ場を提示し、遊ばせた。子どもは、色々な角度から、鑑賞を始めた。次に、教師用の試作（２）（ゴムを長くしたもの・重りを付加したもの・材料を変えたもの）を提示した。子どもは、「さっきつくったものよりも、動きが変わった。今度は、ビヨーンビヨーンみたいだ」などと、動きの変化に気付き、「おもしろうだな、自分たちもつくってみたい」という思いをもった。そして、使う材料や動きを変えると、動く様子が変わり、色々なものに見立てられることに気付いていった。

そこで、テーマ（新１年生に遊んでもらうための、とっておきの動くおもちゃをつくろう）を提示した。子どもは、テーマに向かってつくってみたいという思いをもち、つくりたい動くおもちゃをつくっていった。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

◉動きから見立てさせる手立ての工夫

子どもに動きからの見立てをさせるために、飾り付けをしていないシンプルな試作を提示し、擬態語を問うた。子どもは、「ガタガタと動く車」や「フワフワと揺れる風船」のように、動きから見立てをすることができた。

◉動きからの見立てを増やす手立ての工夫

子どもに、新たな場（高い場所からぶら下げたり、回転させたりするコーナー）を提示したり、友だちのつくったもので遊ばせたりする活動を位置付けたことで、動きからの見立てを増やすことができた。

⑵ 課　題

◉テーマを提示するタイミング

使う材料や動きを次々に変えて試行錯誤をした子どもに、テーマを提示しても、材料の形や大きさからの見立てを基につくる子どもがいた。子どもが十分に動きからの見立てをした上で、テーマを提示する必要があった。

材料・素材を思いつくまま造形し「よさ」が広がる活動

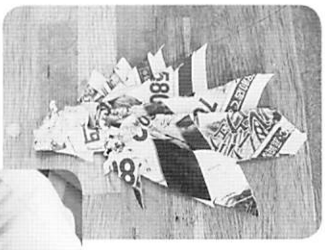
山梨県　笛吹市立御坂中学校
早　川　健　彦

■ 研究発表の内容と趣旨

毎年、各業者から厚い教材のカタログが届く、魅力的に見える教材が所狭しと並んでいる。しかし、自分の少年時代を振り返ってみると、桃畑の切り捨てられた枝をゴルフクラブにしたり、近所の大工やさんで木っ端をもらい船の形に削って川で遊んだりと遊び心さえあれば様々なものが造形物として形を変えた。消費社会の現代では「もの」は瞬間的に扱われては捨てられていく。普段は目にとまらないものでも意識してとらえれば学習に有益なものとして使える可能性がある。楽しみながら学べる教材として成り立つかもしれない。セット教材で失敗したら終わりではなく、何度でもチャレンジしながら造形の可能性やすばらしさを感じる事のできるものはないかと考えている。

今回、紙を素材に造形遊びの要素を取り入れた題材を作れないか考えた。広告紙や段ボール、リサイクル用紙などを自由に造形する活動はどうか。紙は折る・ねじる・編む・結ぶ・貼る・切るなど工夫し様々に造形できる。活動の過程で素材の可塑性や色合いのおもしろさ材質感などを感じながら発想や構想を広げて創造活動が進められる。

造形遊びでも様々な素材に触れることが素材感を豊かにし、素材と自分、そしてまわりの環境との関わりを感じる感性をそだて造形活動に重



要な「力」を高める働きを担っていると考える。その点中学校では、作品づくりが主な活動になりがちで素材感を楽しんだり試したりする活動にねらいを絞って取り組む題材はつくりにくいと感じる。感じて、つくってみて、みつめなおして、また、つくりなおしてと仕上がり中心でなく飽きることなく続いていく活動のなかで生徒の力を育てたいと考えている。

■ 成果と課題

授業の計画当初は、題材にテーマを設け、生徒が主題を基に素材の特徴や特性を感じながら造形できるよう考えた。例えば塔や樹木・ＤＮＡなどのテーマはどうか。造形遊びの要素を取り入れ、素材感を大切にしながら、生徒が内面で生成するイメージを色や形で造形物として表現するために、主題を設定しないことにした。心配な点として「テーマがないと活動がしにくい。」、「参考作品もないと取り組みにくい」、「パイプ状にするなど傾向が似かよる」が考えられた。

はじめは、似たような扱い方が見られたが、次第に他の方法も試すようになり様々な表現方法が編み出されていった。何か見立てをしてつくる事もほとんどなく思いつくままにやれている様子、楽しんでいる様子が見られた。作品の長さ、色合い、形を材料や用具を自由に選び工夫しながら黙々と活動する姿が印象的であった。造形活動の終わりに互いの造形物を見合う時間を作り、造形物から受けるイメージを擬態語や擬音語などを使いながら表現する鑑賞を行った。作者ができた形のイメージを付箋紙にかいて他の生徒が見たイメージと比べてみる方法をとりゲーム性があり、生徒は楽しんで鑑賞ができた。

課題点として造形物の支持体にしようと紙皿や箸を配ったのが、発想や構想の妨げになった面があったと考える。また、パイプ状に加工する方法を全員に１度試させたため、活動の傾向がはじめ似てしまった。参考にするような作品がなかったのではじめに戸惑う生徒もいた。また、広告や新聞などの写真や文字、図などに関心が偏ってしまった造形物もあった。鑑賞の場面では擬音語や擬態語に限定しすぎてイメージから読み取ったことを幅広く伝え合いにくい面もあった。

この授業が次の課題でも感じる、試す、繰り返しやってみるなど自分の表現したい思いを表現するため、飽くなき試行錯誤につながる美術への情熱となり、充実した学びにつながっていくことを願っている。

分科会 3

グループ活動による試行体験が材料・素材とのかかわりを深めることへの効果について

群馬県　中之条町立中之条中学校
荒　木　孝　史

■ 提案発表の内容の要旨

実践研究に用いた題材は、２年工芸「心を潤す光を演出する～ランプシェードの制作～」である。

本題材では、ランプとランプシェードを使い光を演出することを制作の主題とし、合わせてランプシェード本体を美しくあるいは丈夫につくることをめざし学習を進めた。

□ どのように材料・素材にかかわらせるか

［グループ活動による試行体験］

光との出会い：生徒が制作に使用できる４種類のランプ（光源）を用意する。

材料の例示：教師からの例題として、安価で身近に手に入る物を試行体験の材料として用意する。

試行錯誤の経験：グループで材料検討をし、アイディアをまとめ、試作品を制作する。

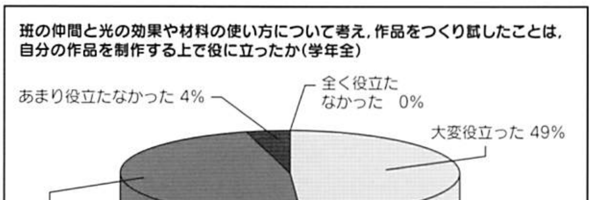
交　　流：意見を交換しあい、作業を分担し制作する。

□ 材料・素材とのかかわりを発想・構想へ

生徒は、グループで試作品をつくり光の演出を試みることで、材料・素材の特徴をつかんだり、自分のイメージに合った材料を見つけ出したりすることができた。

この体験をもとに、アイディアを練りながら、自分が演出に使うランプを選び、身の回りからイメージにあった材料を見つけ出して、光の演出に向けた制作活動を進めた。

学習の終末には、全校に向け発表会を催した。



グループ活動による試行体験の効果について、生徒の作品制作後の自己評価をもとに確かめた。

□ 材料・素材とのかかわりについて見ると

「使い方や作り方が分かった。」「光の強さや光の漏れ方が分かった。」「材料を試すことでアイディアが広がった。」「紙は光が透ける。」「材料の役割が分かった。」「イメージがもてるようになった。」など、試行体験によって制作への見通しが広がり、例示された材料とのかかわりを深めることができたことが見て取れる。

□ グループで活動することで

「自分の考えと違う見方ができた。」「考えつかない使い方、作り方が分かった。」「話し合うことでアイディアが思い付いた。イメージができた。」「（体験で出た）アイディアを使ってみた。」「みんなで材料（和紙）にこだわった。」など、グループの中で刺激しあうことにより、材料・素材とのかかわりがより深まり、制作への見通しがもてたことが見て取れる。

□ 負の評価として

「自分がつくる形と違う。」「材料を上手く使えない。」「みんなで考えたことをまったくやらない。」など、自分の制作には生かせないととらえられる評価が一部（４％）に見られた。

■ 成果と課題

(1) 成　果

◉　グループ活動による試行体験は、材料・素材とのかかわりを深める上で効果がある。

特に、グループでの体験が生徒個々の実態や課題に対して効果を上げている点に注目したい。

- 材料の使い方や作り方を試したい、考えたい。
- 材料の特徴や性質について試したい、知りたい。
- 材料の使い方や作り方を知りたい。
- アイディア（発想・構想）を広げたい。など、生徒個々の疑問や求めに答えることができた。

(2) 課　題

◉　グループ活動の場合、個人の制作に必要な（求める）試行（試作）体験ができるとは限らない。

従って、グループ活動による試行体験に加え、［①アイディアを練る→②試行（試作）する→③アイディアを修正する→④本制作］といった生徒個々が自分の課題に応じて試行できる展開を意識した学習計画の必要性がより高まるだろう。

分科会 3

素材の可能性を探りながら進める造形活動

新潟県　上越市立頸城中学校
金　沢　和　明

■ 提案の趣旨

分科会テーマにある「よさ」とは、子どもたちの内なる「よさ」であり、材料や表現がもつ「よさ」である。この「よさ」を広げるとは、材料や表現がもつ魅力を発見し、新しい見方や感じ方に気づき、創造的な活動の中で新しい自分に出会うことであると考える。

生徒達が活動の中で様々な「よさ」に気づくためには、素直な気持ちで活動を行うことと、多角的に材料や道具、表現方法と関わり試行錯誤を繰り返すことが望ましいと考える。そこで、生徒たちにとってイメージを膨らませやすい素材を用いて、制作の前段階でいくつかの実験的な活動に取り組む題材を計画した。

また中学生は知識や技術を求め、その習得レベルで自己評価する傾向がある。生徒達には、ただ習った通りに上手に「つくることができた」喜び以上に、学習したことを活用する中で、新しい何かを見つけて感動する経験をして欲しい。そこで実験的活動の中に、基礎的技法を習得して活用する活動も取り入れた。

■ 研究実践の内容

題材は、「墨と和紙による表現」を選んだ。墨と和紙は簡素な素材であり、材料の持つ特徴を引き出すことで、表現の可能性が広がる素材である。また水墨画の伝統的な技法を利用するなど、様々な表現を試すことが可能である。

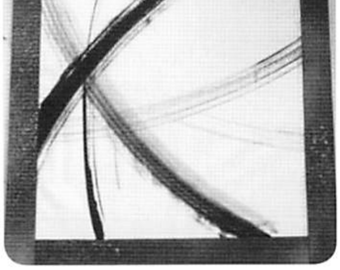
実際には以下のような表現活動、鑑賞活動を、組み合わせて行った。

水墨画の鑑賞活動と、表現の基礎的な知識や技術を習得する活動、言葉からイメージを膨らませて表現する活動を墨と和紙、鉛筆と画用紙の２種類で行い、素材の違いと表現の可能性を探る活動大きな和紙を使ってフリードローイング小さな和紙を使って模様サンプル集め自分の表現サンプルを使った貼り絵、これらの活動を通して、生徒達は自分だけの表現のサンプルをポートフォリオに貯めていった。それらの表現サンプルから発想し、魅力的な画面をつくりだす作品制作を行った。

■ 成果と課題

当初墨と和紙を使用するため、書道のように濃墨を使って線だけで表現する生徒が多かった。しかし水墨画の技法を学ぶことで「書道の制度」から解放され、面で表現する生徒が増えていった。また鉛筆との違いを経験することで、筆のもつ表現の可能性を追求する生徒が増えていった。そして様々な創造的な経験をしたことで、フリードローイングでは自由な発想で表現をすることができたと考えられる。生徒たちの多くは、水墨画の技法の学習が切欠となって、墨と和紙による表現の可能性を追求し、「よさ」を広げることができた。しかしそれは切欠にすぎず、生徒達が一番素材の可能性を追求し、自分が生み出した表現に感動していたのは、フリードローイングの活動中であった。

本題材では、生徒達の多くが墨と和紙の素材感を大切にした作品を制作した。しかしフリードローイングの際、何人かの生徒が和紙をぼろぼろにしてしまった。和紙への墨の染み込み具合を楽しんでいるのだか、自分の行為の軌跡を意識しなくなった時点で、作品制作ではない何か別の活動に変わっていったように感じられた。自分が表現したいことをしっかりと意識出来なかった生徒たちが、創作の喜びを味わうことができずに活動を終えていた。今後、全ての生徒が創造活動の喜びを味わえるように支援する授業を行いたい。



分科会 4

材料・素材等とのかかわりで「よさ」が広がる造形活動

よさを認め、みる楽しみを広げる鑑賞活動

千葉県　千葉市立新宿小学校
北　尾　由紀子

■ 提案発表の内容の要旨

造形活動においては、他者意識を持たせることで、つくる楽しみを広げることが重要である。つまり、作品を見る友達の反応を想像しながら、製作に取り組ませることが、製作活動をより楽しいものにしていくことになる。また、作り手が見られることを想定して、反応を期待しながら製作することは、「見る楽しみを広げる鑑賞」につながると考えた。今回行ったパブリックアートの試みは、単に見る側を広げるだけでなく、同時に、作り手の意識の広がりと深まりを期待している。

一般的にパブリックアートとは、「公共の場にある芸術作品」であり、様々な人たちが集う楽しい場になるように、公共の場に置いた芸術作品のことである。

今回行ったパブリックアートは、５年生が校内のお気に入りの場所に、紙粘土で作った作品を置いた。全校に向けて、一人一人が「作品を見た人にどう思わせたいか（たくらみ）」を考えて構想し、製作した作品を展示した。校舎内の様々な場所に作品を置き、みんなに楽しんでもらおうと計画することで、学校は大きな表現ステージとして、素敵なことが広がる鑑賞活動の場になると考えた。

子どもたちは、校舎内のいろいろな場所から発想したり、作品をあそこに置いたら楽しそうだという思いを巡らせたりしながら製作した。例えば、「自分の気持ちを表したもの」「想像の世界を表したもの」「自然の大切さを表したもの」「日々の生活に潤いを与えるもの」など多様な視点から発想し、製作した作品を廊下の片隅や、校長室、廊下の窓の下、トイレなど、いわゆる公共の場所に置いたのである。全校の友達に探して見てもらい、鑑賞カードにメッセージを書いてもらえるようにした。休み時間になると、どのメッセージコーナーも混雑し、作品を鑑賞しながら熱心に書いていた。鑑賞カードは累計で、3038通にも達した。

ただ作品を作るのではなく、他者を意識して作品を作ったことで、みること（みられること）へのこだわりが生まれ、鑑賞後も、「もっと違った作品を作っていたらどうだったのかな」と新たな試みをする子どももいた。他学年からたくさんのメッセージが届き、見られていることを漠然とではなく、明確な事実として意識することとなった。作り手は、伝えたいことを視覚的に訴えることに興味をもち、伝わるようにするには、どんな色や形にしたらよいかを熟考するようになった。

作り手である子どもたちも、友達の作品をいつものように並べてある作品として鑑賞するのではなく、どこに置いてあるかわからない状態で、自分で探して歩いて、見つけて鑑賞する楽しさがあった。

また、いろいろな学年の友達が休み時間に一斉に、いろいろな場所で作品を見て鑑賞する姿を見ることで、その様々な反応をみる楽しさがあった。年齢の差や個人差や子ども同士ならではの、わかり合う楽しさも見られた。作品を通して面白さや楽しさ、意外性などを伝えることはもちろん、相手と過ごす空間を共有する活動を楽しむこともできたと考えている。

■ 成果と課題

(1) 成　果

◉ 「こんな風に思わせたい」という思いをもち、他者を意識することで、みること（みられること）へこだわることができた。また、全校で鑑賞活動をしたことで、異学年交流をしながら、みる楽しみを広げることができた。

◉ 表現した作品は、コミュニケーションの媒介となり、見る側にも様々な反応があった。造形活動に伴う関わり合いを通して「つくり出す喜び」と「鑑賞の楽しみ」双方を味わうことができた。

◉ それぞれの子ども達にとって、自分の見方・考え方が受け入れられることで、鑑賞への興味を深め、他者の見方を尊重する姿がみられた。

◉ 作り手は、他者へ伝えたい内容として何が重要なのかを整理し、よりわかりやすく伝えようとする姿がみられた。

(2) 課　題

◉ よりパブリックな空間を広げるためには、地域の商店や公共施設に作品展示するなど検討する必要がある。

分科会 4

試す活動から発想する 題材の構想

長野県　長野市立湯谷小学校
名　取　はるな

■ 提　案

(1) 題材名

好きだな　この色　このかたち
～紙のランプシェードをつくろう～

(2) 題材設定の理由

アルミホイルを使った造形遊びの中で、偶然生まれた形を見立てることや、自分なりに表し方を工夫することを楽しんだ子どもたちに、紙という素材のよさを生かしてランプシェードをつくる題材を実践した。

アルミホイルは、すぐにちぎれてしまったり、一度丸めてしまうとなかなか元のように広げることができなかったりした。これに対し、トレーシングペーパーやお花紙といった紙は、ある程度の強度と可塑性を兼ね備えており、何度も丸めたり広げたりすることができる。同時に、光が透ける薄さという特性を生かし、光を当てながら試す活動を取り入れることで、それぞれが「いいな」と感じる形や表し方をより追求できるのではないかと考えた。また、アルミホイルにはなかった色の要素にも着目させることで、異なる色の紙を組み合わせることで生まれる、形と色のひびき合いを楽しみながら表現してほしいと願い、本題材を設定した。

(3) 題材展開の大要（全４時間）

- 第１時　トレーシングペーパーに手を加えたり紙を重ねたりすることによって、光の透け方にちがいができることに気付く。
- 第２・３時　お花紙（ピンク・黄・水・白）を加えて光の透け方を試したり、友だちとお互いの工夫を見合ったりして、自分のランプシェードに使いたい透け方を探す。
- 第４時　これまでの気付きを基に、紙のランプシェードをつくり、友だちとお互いの作品を鑑賞し合う。

(4) 指導上の留意点

- 一人一つずつ電池式のLEDライトを使えるようにし、暗幕を引いて教室を暗くした状態にして授業を行った。
- 大きなペットボトルを５～10cmくらいの高さになるように輪切りにしたものを用意しておいた。これをライトの上に置いて、内側に紙を入れるなどして光の透け方を試してみるように促した。

■ 成果と課題

(1) 成 果

◉　子どもたちは、紙を重ねて光の透け方を楽んだり、穴を開けてそこから漏れる光の様子を確かめたりしながら、自分なりに素材に働きかけて意欲的に活動していた。

◉　グループで向かい合って学習する場の設定がなされていたことから、自然に友だちの表現を見合い、自分の表現に生かしていくことができていた。

◉　発想することを苦手に感じている子どもが、造形遊びのようにいろいろと試す中で、「こんな色や形にしたい」という作品のイメージをふくらませることができた。

(2) 反省・課題

◉　「造形遊び的な色の違いを楽しむ」というところがメインとなってしまい、「自分のランプシェード」というところまで子どもの意識が高まっていなかった。「勉強部屋にかざりたい」「おばあちゃんにあげたい」というような用途や目的を考えるように促し、子どもの願いを活動の動機付けとした題材展開にすべきだった。

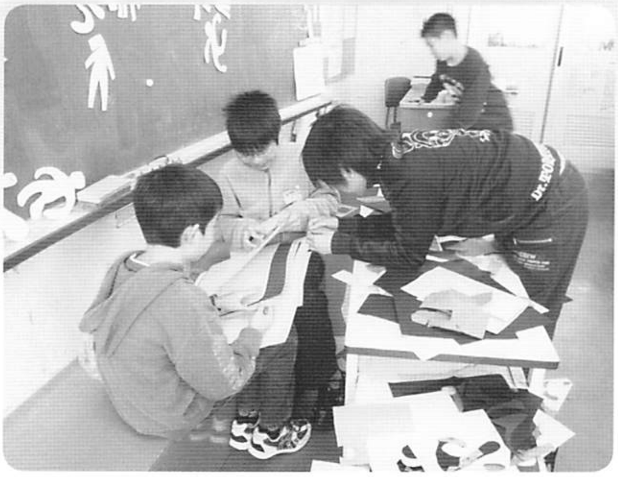
◉　素材だけでなく、（造形物から生まれる）光や影に着目していた子どもたちがいたので、そういった子どもたちの気付きを全体に紹介する場面も設定した方がよいと感じた。

◉　素材に対して光源が弱かった。光のよさが出せるよう、光源をもっと強くできるような工夫を考えたい。

分科会
4

かかわりの中で 豊かな表現力を育てる指導

新潟県　新潟市立亀田東小学校
尾　形　美　穂



■ 提案発表の内容

マティスの『ジャズ』の作品を鑑賞し、アートゲーム（それぞれどんな作品名がついているのか、当てるゲーム）をする。その後、色画用紙の色や形の組み合わせ、画面の構成を工夫して、切り絵の作品をつくる。児童の実態としては、経験不足から制作において受動的な児童が多い。したがって、教師が意図的に様々なかかわる場を設定したり、働きかけをしたりすることが必要になってくる。そこで、アートゲームやアイデアの交流、友達の作品の鑑賞などのかかわりの場を設定して、相互に刺激し合いながら、児童が自ら表現したいものを見つけ、思いを広げてどんどん表現し、つくり出す喜びを味わうことのできる授業を展開することが、「豊かな表現力」を育てることになると考えた。

アートゲームにおいて

自由に話し合いながら、色や形について自分の見方を話す姿が見られた。さらに、その話し合いの内容を学級全体に返したところ自分たちの班の話し合いと比較するようなつぶやきや発言が出てきた。正解の題名に納得したり、驚いたりと様々な反応が見られた。

制作において

学習隊形をたがいの作品が見えるように変えたことで、友達の作品に視線を向けながらつくったり、近くの友達に意見を求めたりしながら制作している姿が見られた。また、自由に友達の作品を見て回り、作品について話している姿が見られた。材料の色画用紙を一か所に置いたことで色を選びながら、作品について話し合っている姿も見られた。

鑑賞活動において

作品の解説と絵を比較しながら、作品を鑑賞する姿が見られた。なかなか、友達の作品の良さを見つけて書けない児童は、すでに貼られている付箋を読みながら、それを参考にして、書いている姿が見られた。

■ 成果と課題

(1) 成　果

◉ 抽象的な形にとまどいを感じていた児童もアートゲームを通して自由に発想することの良さを知り、意欲的に取り組むことができた。

◉ 他の児童の作品が見えるような学習隊形を工夫したことで、他の児童の作品にも目を向けけたり、作品について話合ったりする姿が見られた。また材料の色画用紙を一か所に置いたたことで色を選びながら、作品について話し合っている姿も見られた。このことから、かかわりの場の設定としては有効であったと考える。

◉ 導入の時点で、作品ができたら解説を書くことを伝えていたことで作品に思いや意図をもたせて制作に取り組ませることができた。また、解説があることで、友達の作品の色や形が何を表わしているのか知ることができ、作品を見る観点になっていた。

(2) 課　題

◉ その時・その制作前にお互いの作品を見せ合うよりも制作時間の途中で、自由にかかわらせた方が有効であった。かかわりの場を設定するタイミングを検討する必要がある。

◉ 作者の表わした色や形と自分の作品の見方を比較したり、色や形だけでなく、作者の想いに触れて作品の良さを見つけることができるような視点を与えると他の作品を鑑賞するにとき生かすことができたのではないかと考える。

分科会 5

友達・仲間等とのかかわりで「よさ」が深まる造形活動

遊びの「能動的な性格」を重視した造形遊び

埼玉県　川島町立出丸小学校
大　野　理　恵

■ 提　案（第２学年）

題 材 名　「○○な島をつくろう!!」（造形遊び）

題材内容

身近にある材料（新聞紙・ペットボトル・木片）を使って、3グループに分かれた児童が、校庭のそれぞれの場の特徴を生かした造形遊びを展開する。

また、完成した「○○島」をそれぞれのグループがプレゼンテーションし、工夫した点などを発表することにより、互いのよさや特徴などを鑑賞し合う。

題材のねらい

本校は、児童数85名、全て単学級の小規模校である。純農村部を校区とし、教育活動への深い理解とあたたかな支援を惜しまない保護者や地域住民に支えられている。

本学級の児童は明るく元気で、様々な活動に意欲的に取り組み、図画工作が好きな児童が多い。しかし、２学年に進級して入学当初ののびのびした活動から、次第に作品の完成度や技巧性を気にしたり、キャラクターや教師のアドバイスに頼ろうとしたりする傾向が見られるようになってきた。

そこで、遊びの「能動的な性格」を重視した造形遊びを、共同制作の形で展開することによって、体全体を使った活動を行いながら、協力して製作する楽しさを体感させ、さらに互いのよさや違いを認め、イメージを高め合う姿勢を身に付けさせたいと考え、本題材を設定した。

埼玉県の造形教育の研究テーマとのかかわり

埼玉県美術教育連盟では、来年度の関ブロ大会（埼玉県所沢市）の実施に向けて、「見つめよう　子どもの心　育てよう　確かな力」をテーマに研究を進めてきた。造形活動に表れる「子どもの心」（思いや願い）と培われる「確かな力」（生きて働く力）とは何か。私たち教師は、それをどのように掴み、育て、確かめるのか。そして、子どもたちの**「自己肯定感」**の育成との関係を切り口に、本題材を見つめ直したいと考えた。

実践内容

○造形遊びの要素（豊富な材料と魅力的な場、五感を働かせた活動）の視点から

材料は、児童の身近な材料を利用することで、興味を引くのではないかと考えた。活動したい場所を選ばせ、グループを構成した。３色のラインカーを用意し、選ばせた。児童は、友達とどのような線を引くか話し合いながら、自分の思い描く線を引いていた。同じグループの児童は、その線を見たり、材料と向き合ったりしながら、発想を広げていった。木の周りを線で囲み迷路をつくったり、タイヤの穴の下に木材を並べて道路をつくったりするなど、場の特徴をとらえて活動した。

■ 成果と課題

遊びの「能動的な性格」（要素）の視点から

遊びには、子どもたちを引きつける要素がある。本題材では、特に「つなげる、結ぶ、まく」といった「技能」、遊びをするための「道具や場」、グループによる「競争」を活動に取り入れた。

そのことにより、それぞれの場に引いた線から、発想を膨らませ、並べたり、ぶら下げたりと造形活動が始まった。大量の材料に触れ、五感を働かせていった。また、声をかけ合いながら、友達と一緒に島作りに励んでいた。他のグループの作品を鑑賞することで、「みんながやっていないことをやろうよ。」「遠くまでつなげてみよう。」など、向上心をもって活動していた。

埼玉県の研究テーマからの視点

本題材では、「子どもの思い」に焦点を当てて、実践した。校庭という広い空間に、自由にのびのびと活動することで、児童は自己表現することの楽しさ、喜びを味わうことができた。

長い線やジグザグの線を並べたり、引いたりするなどして、広い場を生かし、大きな活動ができた。どの児童も自分の活動に自信をもって取り組んでいた。つくりたいという意欲を強くもち、主体的な活動が見られた。

この造形活動を通して、友達や教師から認められ、「やってよかった。」「とても楽しかった。」などの声があり、満足感・達成感を味わい、多くの児童が「自己肯定感」を高めることができた。

分科会
5

つくる過程を大切にし、ふれあいや話し合い等、友達・仲間とのかかわりを深め、よさが広がる表現活動はどうあったらよいか

茨城県　行方市立玉造小学校
山　中　裕　子

■ 提　案

本題材は、思い出の写真をもとに発想を広げ、表現を楽しむ造形活動である。卒業を間近に控えた児童に、これまでの造形経験を総合的に生かした作品をつくらせたいという思いから、この題材を設定した。「自分の心に残しておきたい思い出を形にしよう」と投げかけ、授業はスタートした。事前に、とっておきの思い出の写真を１枚選んで、学校にもってくるように話しておいた。すると、児童は、思い思いの写真を選んできた。自宅に気に入った写真がない、自分では決められない児童には、廊下や教室に掲示してある行事の写真の中から選ばせた。大事な写真はカラーコピーをしたり、児童の希望で拡大コピーをしたりした。

このようにして各々が用意してきた写真を見ながら、第１時はその時の様子や気持ちなどをふり返りながらワークシートに書き込む作業を行った。その後、グループで友達の写真を見合いながら、感想や質問、アドバイスなどの話し合いの時間をもった。本題材のように材料や表現方法を自己選択して活動する題材は発想が豊かな児童にとってはやりがいのある題材であるが、そうでない児童にとっては難しい。そこで、互いに写真を見せ合い、話し合いをしながら、その時の気持ちを友だちと一緒に考えたりして、思いを広げ、作品の計画を立てることができるよう配慮した。

写真を見せ合いながら、話し合う

写真に対する思いから広がった発想を表現していく活動では、毎回、活動の最後に隣の席の友達と製作途中の作品を見せ合い、材料や表現方法のよいところをほめたり、こうした方がよいと思うことをアドバイスしたりした。話し合ったことは付箋紙に書いて相手に渡し、もらった付箋紙はワークシートに貼り、次の活動に生かすことにした。児童は、自分の思いを大切にしつつ、それをどのように表現したらその写真に対する思いにふさわしい表現になるかを友達との関わりや話し合いの中から、さらに良い表現はないか模索し、造形的に工夫してつくっていくことができた。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

- ◉ 導入時の話し合いでは、宿泊学習や陸上記録会、家庭科の調理実習など、共通の体験をした写真があったので、「こんなことあったよね」「こうだったね」というように、共有した思い出を振り返り、イメージを広げていくことができた。また、個人的な写真をもってきた児童は、友達に写真の説明をしたり、逆に質問をされたりして、自分だけでは気付かなかったその時の気持ちや思いに気付き、作品に生かすことができた。
- ◉ 導入、製作の段階で話し合いを複数回もつことで、友達からよい刺激を受け、自分のイメージが広がり、新たな発想が生まれていった。

友だちの作品へのアドバイス

- ◉ 製作時の話し合いでは、つくる過程の中で友達からアドバイスをもらったり、友達の作品から刺激を受けたりしたが、布や紙粘土、段ボールなど同じ材料でも一人一人違った使い方をしていたのが印象的だった。付箋紙に「先週と比べてだんだん形になってきたし、工夫されてるね」「前は写真がぐらぐらしてたけど、わりばしで支えをつくったのでよくなったね」など、相手の作品のよいところをたくさん見つけてほめる言葉が多かったので、製作への意欲はさらに高まっていった。

⑵ 課　題

- ◉ イメージの広がりとともに必要な材料が変わったり、試行錯誤の末、これではできないという児童がでてきた。材料や用具の使い方について、使い方を工夫させる支援方法や教師側で準備する材料について深く検討することの必要性を感じた。

分科会
5

取材から表現、表現から交流へと かかわりを大切にした造形活動

新潟県　妙高市立新井小学校
梅　澤　尚　子

■提　案

学　年　３学年
題材名　「ありがとう！新井小学校
～お世話になったみなさん・
プロフィールを絵にしよう～」

提案発表の内容の要旨

教室を飛び出し、自分の目で耳で確かめ、何でも知りたがる３年生。その対象に向かって生き生きと働き掛けていく３年生の特長を図画工作で生かすことはできないかと考えこの題材を設定した。

校舎改築のため、平成23年５月に今まで過ごしてきた校舎が取り壊される。「この校舎でお世話になった人たちを忘れたくない」など、３年生なりの愛着や感謝の気持ちを知ることができた。そこで、「人」に焦点をあて、職員45名の一人一人のことを絵にすることによって、校舎への思いを表現することにした。

人物を絵にすると聞くと肖像画のようなものを想像することが多い。しかし、この題材では、単に「顔」や「姿」を写実的に描くのではなく、「画面からその人がどんな人なのか分かるような絵」にしていく。そのためには、目には見えないその人を取り巻く様々な情報が必要となる。その「様々な情報」が「プロフィール」である。プロフィールを探るために、「取材」することから始めた。

45名の職員の誰を絵にするのか担当を決め、アタックインタビューに出掛けた。予め、「誕生日」や「好きな色」など10項目の質問内容を決めた。普段、あまり顔を合わすことのない調理員さんの担当になった子どもたちは、緊張気味に給食室に入り、取材の趣旨や内容を自分の言葉で語った。優しくて温かな調理員さんの応対に安心感を抱き、話されたことを聞き逃さずメモしていた。このように、相手と直接かかわり、対話することで、「その人となり」を肌身で感じ、そこから得られた印象やイメージが表現に有効に生かされていくと期待する。

四つ切画用紙には、「顔」を中心に、背景に「プロフィール」が思い思いに表現された。「取材したことをどこにどのように表わしたのか」などについて友達に知らせるために「○○先生のことを紹介します！」という題目で鑑賞交流会を開いた。

クラスを「説明する人（作者）」と「鑑賞する人」の半分に分け、ポスターセッションの形態で行った。背景にちりばめられている様々な色や形。どうしてそれを描いたのかを語ることは、イコール、その職員のことを友達に紹介することになる。また、質問することでより表現への気付きが深まる。「絵」を通して、交流が深まり、作者の思いや対象についての情報を共有することができた。「へえー、○○先生のひみつが分かったよ」など、新しい発見や驚きがあった。

■成果と課題

成　果

つくる過程を大切にして実践した。子どもたちは、「○○先生、喜ぶかなあ」などと、相手に思いを寄せ、制作した。「職員」「友達」と言葉を交わし、コミュニケーションを図ることで、共感や親睦を生み、つながり感を育むことができた。職員も、自分のことを絵に表してもらうことに喜びを感じていた。自分を語り、子どもたちに期待する職員。それに応えようとする3年生。相互にかかわり合いながら、1枚の絵ができあがっていった。

課　題

「言語活動の有効な取り入れ方」について模索した。言いたいことを自分の言葉で語ることに苦手意識をもつ子が多い。インタビューなどにおいて、セリフを棒読みにするのではなく、相手との自然な交流によるコミュニケーションができる子を育てたい。今後も創作活動における言語活動の位置づけや在り方を探っていきたい。

美術教育で開く学校文化
～特別活動とのつながりの中で～

静岡県　伊豆の国市立韮山中学校
杉　坂　洋　嗣

■提　案

赴任当初（6年前）の本校は生徒指導困難校という性質をもっていた。そのために、表現の自由が保障されない、人権尊重の感覚が希薄であるといった状況に陥ってしまい、コミュニケーションの不全を招いていた。その一方で、表現偏重の教育が子どもたちの学びをさらに孤立化させていた。　そこで、このような「学びの孤立化」を、学びを周囲へと開くことで「学びの共有化」へと変換することを考えた。そうすることで、まず、新たな自己や周囲と出会う場を演出し、その中でコミュニケーションを介した自尊心や自己肯定感の獲得を誘発する。そして、そこで得たコミュニケーションの快楽が、学ぶ意欲を高め、学ぶ意味や価値を生み出すだろうと考えた。

実践①「アートかの川絵画交流作品展」

美術科と生徒会活動のつながりの中で生まれた実践。地域で活躍する芸術家と協力して、学校内で展覧会を開くという本実践はポスターの作成から、受付まで、生徒が中心となり運営を行った。校内の会議室を1ヶ月間にわたりギャラリーとして開放し、多くの方に来校していただいた。また、生徒の作品も同時に公開展示し、作品を介した地域との交流を図った。展示期間中には実際に鑑賞をギャラリーで行い、作家に自分の感想や考えを伝える活動を行ったり、作家の方に講演を行ったりしていただき交流を深めた。

特別活動とのつながりの中で生まれた本実践は、生徒の中にあった「何かをしたい」「新しい活動を企画したい」という思いが形となった実践であった。生徒自らが、自主的・自発的に企画・運営に関わり、学校や地域の文化的な活動の創造に携わっていくという経験は、その後の自治的な活動への発展に大きく寄与するものであった。

実践②「巨大画プロジェクト」

生徒会を中心に全校生徒一人一人が18㎝四方の画用紙に絵を描き、それらをつなぎ合わせて一つの巨大な絵を完成させた実践。生徒会による話し合いの結果、「静岡県や地域に馴染みのある図案にしたい」という思いから、ＭＯＡ美術館所蔵の『紅白梅図屏風』（尾形光琳作）の模写を制作することに至った。卒業前の学校行事の中で披露され、全校生徒が歓喜に包まれた。またその後、実際にＭＯＡ美術館での展示が決定し、地域へのつながりに広がった。共同制作のポイントは、周囲との関わり合いや、伝え合う活動を通して、互いの個性を生かし合い、協力して創造活動に取り組む喜びを体験し、自尊心や自己肯定感を高めることにある。本実践は18㎝四方の画用紙に、割り当てられた自分の絵を描くだけではなく、上下左右のピースとズレが起こらないように合わせながら描き進めなければならないため、「この線をどのあたりでつなげ合わせるのか」「バランスはどうなっているのか」と周囲と関わり合いながら活動に取りくむ中で自然に対話が生まれ、伝え合う活動につながっていった。全体で合わせては離し、再び合わせてはまた離す。この活動を繰り返す中で、積極的に制作に関わっていく生徒の姿が印象的であった。

■成果と課題

６年という時を経て、本校は落ち着きを取り戻し、文化が息づく学校に生まれ変わった。新たな学校文化の形成はゆるやかに、そして確実に開かれている。「学びの土台」とは学校文化そのものである。その意味で学校というシステムの中で、一人一人の生徒が主体的に学校文化の形成に関わることができたことの成果は大きい。また、その中で美術の力が生きる力へと変容する過程を生徒だけではなく、教員集団も共有することができたことが大きな意味を持つことを成果の一つとして付しておきたい。

最後に、学校が社会の縮図としての教育的役割を果たしているとすれば、本実践の成果はより大きなものになるだろう。その意味で、学校というシステムと美術することの意味を批判的に問い続け、問い直していくことが必要になることを今後の課題としてあげておきたい。

分科会 6

中学校最後の美術
～今と未来を大切にする題材～

東京都　中野区立第二中学校
猪　口　正　和

■ 提案発表の内容の要旨

かねてから３年生最後の題材について考えていた。義務教育の最後であり、生徒によっては、高校に進学し芸術で美術を選択しなかった場合、学校で美術を学ぶ最後の機会となる。

３年間ともに過ごした仲間との残り少ない時間を大切にしつつ、ものづくりそのものの楽しさや完成の充実感を味わうことができる。準備が容易で、卒業式までの変則的な時間割にも対応でき、かつ短時間でも仕上がる。シンプルに仕上げる事もできれば、こだわる気持ちがあれば細部に凝ることもできる。そんな題材を探していたところ、この「カレッジリング」という題材と出会った。

カレッジリングとはもともとは欧米の文化で、大学を卒業するとき贈られる、その大学のオリジナルリングである。その「卒業記念リング」というコンセプトを土台に、中学生が愛着をもって制作に向かい、完成したものを慈しめるようにアレンジを加えた。

準備　・グラインダーで穴を開けた丸い木片
・リングスケール
・糸鋸、棒ヤスリ、紙ヤスリ
・ベルトサンダー
・アクリル絵の具、ニス

手順　①どの指にはめるか決める。
②自分の指輪のサイズをリングスケールで測る。
③アイデアスケッチをする。幅や厚みを考慮する。
④棒ヤスリや糸鋸で木片の中心の穴を自分のサイズに広げる。
⑤ベルトサンダー、糸鋸で幅や厚みを調整する。
⑥棒ヤスリや彫刻刀でデザインを彫る。
⑦アクリル絵の具で着彩、ニスを塗装する。
⑧乾燥させ、完成。

本分科会のテーマである「仲間とのかかわりでよさが広がる表現活動」という観点で本題材を見たとき、一番大きなポイントは「どの指にはめるか」ということである。

指輪というものは、はめる指によって意味が異なってくる。小指は予知能力・直感が鋭くなる。薬指は心臓に一番近い指とされ、聖なる誓いを表す。中指はより高いゴールを目指したいとき、創造的な仕事をするときにもよい。人差し指は活動的になる。自立心が高まる。親指は望みが叶う。といったように様々な意味をもっている。

これからの進路、こう在りたい自分、そんな未来への前向きな意欲と指輪の意味を照らし合わせて、どの指にはめようかと仲間と相談することによって制作へのモチベーションが高まっていった。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

◉明るい雰囲気を醸成する

指輪というものは嗜好性が高く、個人の好みが反映されやすい。装飾に凝る生徒もいれば、色彩や細工は加えず、規定の大きさのものを自分のサイズにカスタマイズする過程に没頭する生徒もいた。途中でも指にはめて、完成までの制作を楽しんでいた。

⑵ 課　題

◉素材として耐久性に限界がある。

木製（桂）なので細工が細かすぎる、幅が薄すぎると割れてしまう。

分科会
6

他者の視点を参考に、アイディアを選択する授業

新潟県　上越市立城東中学校
齊　京　　香

■ 提　案

デザインの授業を行っていると、アイディアスケッチから本制作に移行する際に、どの案を採用したら良いかでつまずく生徒が少なくない。そこで、互いに作品を鑑賞し合い、良い点・改善点を出すことで、他者の視点を参考に自作品の良さに気づき自ら考えて案を比較検討・選択することができるようにしたいと思い、このような実践を行った。

２年生の前期は「プロデュース＊世界初」と題して、新商品のパッケージデザイン（ペットボトル）を行った（全14時）。課題を始めるにあたって、事前に宿題で現在売り場にある商品を調べておき、最初の授業でそれを班ごとに発表した。既存商品の情報が集まったところで、オリジナル商品を手がけるわけだが、①飲み物の種類は既存の物で、パッケージのイメージを新しくする方法②飲み物の種類自体を現在販売されていない(摩訶不思議な秘薬を含む)ものにする方法の２つの切り口を紹介し、購入意欲を喚起する魅力的なデザインを考えさせた。

本時は第５時で、複数出したアイディアスケッチのうち、どれを実際の作品に採用するかを決めるために、お互いの作品にアドバイスし合う授業である。

まず始めに、今まで考えてきたアイディアスケッチを自分で振り返り、それぞれの案のセールスポイントについて考えさせた。その後、４～５人の班に分かれ、自分の作品のセールスポイントについてプレゼンテーションをし、聞き手は相手の作品についてどの案がどのように魅力的か、どんな改善が必要かなどをアドバイスカードに記入した。発表者は製造・販売者の視点に立ち、いかに自分の商品が有益か、また商品のイメージを伝えるためにどんなレイアウトや配色など工夫を考えたのかを持ち時間２分で発表した。一方、聞き手は発表者のプレゼンを受け、どの案が購買意欲をかき立てられるか、商品イメージをより効果的に表しているか、今後どんな改善を加えると良いかなどを購入者の視点に立ってアドバイスした。

班内プレゼンテーションの様子

これを受けてそれぞれが今後本制作に移るのだが、生徒達の多くは自分とは視点の違うアドバイスや発想に刺激を受けて、今後の制作について意欲的に考えていた。

班員へのアドバイスカード

■ 成果と課題

(1) 成　果

◉　アイディアを選択する際には、それまで必ず何名かの生徒は、「先生はどれが良いと思いますか。」や「どれが簡単にできますか？」といった、安易な方向に流れる質問をすることがあったが、今回のように制作途中で意見交換する時間を設定すると、自分には見えなかった自身の作品の利点や改善点を発見することができ、制作意欲を喚起されるとともに、それをよりどころに本制作へ採用する案をより主体的に選ぶことができた。

◉　他者のプレゼンテーションを聞き、鑑賞することを通して自分には思いつかなかった発想や視点を得ることができ、その後の制作を進める上での参考にしようとしていた。

◉　作品のプレゼンテーションを他者にわかりやすくしようとすることで、必然的に自分の作品について客観的に見直すこととなり、自ら作品の良い所や、改善が必要なところを考えるきっかけとなった。

(2) 課　題

◉　制作進度には個人差があるため、全員が望ましいタイミングでアドバイス交換に臨めるというわけではない。アイディアを出すのに時間がかかる生徒に対する支援が必要である。

◉　互いに視点が違うといことは、自分が気に入っていたアイディアが必ずしも他者の支持を集めるわけではない。それを参考に、前向きに他者の意見を取り入れたデザインにしようと工夫する者もあれば、お気に入りの案が支持を受けなかったことで意欲をそがれるように感じる者もいる。彼らに対して発想の転換ができるような支援が必要である。

一人一人の感じ方・見方を深めるための鑑賞活動のあり方

群馬県　前橋市立敷島小学校
岩　﨑　寿美子

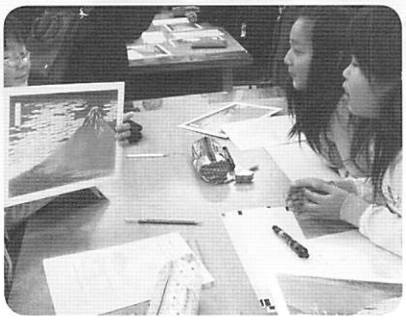
■ 提案発表の内容の要旨

児童は、鑑賞活動において絵を観て自分なりのよいと思うところを見つける活動は、楽しんで行っている。しかし、友達の作品を見合う場面では、本物に近い作品だけが良いと考える傾向が強く、表現の意図や特徴などに目をつける児童は少ない。本題材では、一人一人に教材としての絵を配布し、ワークシートに感じたことを記入させる。次にグループで意見交流し、更に全体で話し合うという活動を取り入れた。個からグループ、全体というプロセスを経ることにより様々な意見を聞き、いろいろな見方や感じ方に触れることで、児童に鑑賞の幅が広がるものと考えた。教材としては浮世絵を取り上げた。我が国の美術表現のおもしろさを見つけることにより児童の見方や感じ方を深めることをねらいとした。

１時間目は、児童にとって知名度の高いゴッホの作品を導入として取り上げた。『ひまわり』の絵を鑑賞した後、ゴッホの絵に色鉛筆で塗り絵をし、その作風などを話し合った。更にゴッホの絵『タンキーじいさん』の背景に日本の絵があることから、次時へのつながりとした。

２時間目は、１時間目に使用したゴッホの絵に描かれている浮世絵を提示した。海外での評価が高く、外国の作品にも影響を与えた浮世絵を鑑賞する。教材として葛飾北斎の『凱風快晴』と東洲斎写楽の『奴江戸兵衛』の２枚の絵を掲示した。鑑賞活動で着目するための視点として①色②形　③立体感の３点を示した。浮世絵をカラーコピーしたのを一人一人に配布し、絵を見ながら各自が気づいたことをワークシートに記入する。、ワークシートには絵を印刷し、自由に書き込めるようにした。その後、グループ毎に意見交流をする。各自が気づいたことを紹介し合った後、グループ内で出された意見がどの視点に当てはまるか話し合い発表用カードにまとめた。カードは、全体に分かりやすく伝えるため、視点毎に色分けしたものを用意した。

更にグループでまとめた意見を発表し合い、クラス全体の中で意見交流を行った。話し合いを円滑にするため、出された意見を発表用カードを用いて黒板に視点毎に掲示した。子供達からは「日本のアートはおもしろい」「もっと日本のアートを見てみたい」などの感想が出された。


グループでの意見交流

３時間目は、暮らしの中にある物から児童なりに「日本らしい」と感じた物を持ち寄り、鑑賞し合った。とっくり、扇子、手ぬぐいなどを持ち寄りポーズをつけたりしながら鑑賞活動することの楽しさを味わうことができた。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

◉　導入段階で、児童になじみのあるゴッホの絵画から浮世絵を取り上げたことは、児童の興味関心を高め、めあてに自然に流れることができた。

◉　掲示資料は、児童の実態に即し、興味関心を大事にした選定をすることができた。また、本物の浮世絵を見せた際は、「へー、わー。」という声がたくさん聞かれ、感動が素直に表されていた。本物を提示することの大切さが分かった。

◉　一人一人にコピーした絵を配布したことにより自分の絵として捉えることができた。ワークシートに自分なりに感じたことや気づいたことを書くことによりその子なりの見方が深まった。またワークシートに絵があることにより、どこが良いかを表現しやすかった。

◉　日本の伝統的な美術作品に触れたことで、児童が日本のアートに興味を持つ契機となった。

⑵ 課　題

◉　浮世絵が仕上がるまでの工程や画家の作品への意図などの知識をしっかり持つなど、授業者自身が取り上げる絵の作品感をより明確にして授業に臨むことが大切であると感じた。

◉　クラス全体で作品の良さやおもしろさを見つけ、深め合うとい点では、不十分さが残った。自分の言葉で発表し、スムーズな話し合い活動のあり方など友達との交流を通して、見方や感じ方を深め合うための方法を更に追求したい。

分科会
7

友達や仲間等と共に見る楽しみが深まる鑑賞活動

栃木県　足利市立協和中学校
中　澤　誠　一

■ 提　案

『届け、私たちの想い!!』これは我が校の10月に行われる学校祭のスローガンである。今年は東日本大震災の後の学校祭として、「私たちはつながっている」を合い言葉に、地域で生活をしている人とのつながりを再発見し、助け合いや感謝の気持ちを育むというテーマが設けられている。

そこで美術科としては、我々の暮らしている足利市の特産品や自然、観光地などに着目し、ご当地ならではのキャラクターをデザインして、発表するという課題を設けてみた。

単純化したり擬人化したりして表現するイラストレーションは、写実的な表現の苦手な生徒にとっても取り組みやすい。配色などにも工夫をこらし、ユーモアのある独自のデザインを楽しみながら発想させたいと考えた。

鑑賞の時間には、一人一人に完成したキャラクターを発表する場を設けた。発表を聞く側はただ単に作品の感想を記録するだけでなく、発表者の態度や内容などから、どのくらい作品への思いが強く伝わってきたか等も評価させた。

【授業の流れ】

① 発表者は自分のデザインしたキャラクターをクラスの前で紹介する。（２分程度）
- キャラクター名
- キャラクターの特徴
- 基になったキャラクターのＰＲ　等

② 聞く側は作品について質問をする。
- 発想の段階で考えたこと
- 工夫点
- 完成してみての感想　等

③ 聞く側は発表者のよいところを見出し感想を述べる。
- 作品について
- 発表の態度や内容について

■ 成果と課題

生徒は日頃から大勢の前に出て発表することに慣れていない。きちんと順序立てて、相手にわかりやすく自分の思いを伝えるといったこの授業は、とてもよい機会となった。また、発表を聞いて、その友だちの考えやよさを見出すことができたとともに、地元に対する愛着を強めることができたのではなかろうか。

当初発表者には、企業のプレゼンのようにキャラクターを通して地元の良さを熱くＰＲしてほしかったが、なかなかこちらの思い通りにはいかなかった。やはり恥ずかしさが先に立ってしまい、一刻も早くこの場を離れたいという様子が特に女子に見られた。その反面、男子が授業を盛り上げ、幾分和やかな雰囲気になったのも事実である。また発表者に対して、どんどん質問や感想が出ることを期待したが、毎回同じ生徒に偏ってしまった。そこで、挙手の他に全員が必ず１回は発言できるように指名制にした。何を聞いたらよいのか分からない生徒には、いくつかの質問例を提示し、感想も漠然としたものにならないように、こちらで用意した造形要素的な言葉を使って述べるように指導した。

今回の授業を振り返ると、予想以上に手がかかって、内容を変更する結果となった。しかしこのような機会を設けなければ、なかなか生徒の語彙力や発言力の向上は望めない。また、今回は生徒一人一人に発表させたため、だいぶ時間を費やしてしまったが、共同でアイデアを考えさせたり、話し合いや発表の形態を決めさせたりすることで、更に言語活動が活発になると期待できる。今後もいろいろと模索しながらよりよいものへと取り組んでいきたい。

分科会 7

鑑賞活動において 多様な視点でみる楽しさに気付かせる手立て

新潟県　見附市立名木野小学校
堀　　和　宏

■ 提　案

学習指導要領が改訂された。鑑賞活動への関心も高まっている。しかし、鑑賞の目標や内容に示された姿に迫るため、子どもに何をどう投げ掛けて指導すればよいか、悩むことはないだろうか。

子どもが時間をかけ心を込めてつくり上げた作品を見合い、語り合いながらそのよさや美しさを共有し学び合えるように、製作後の鑑賞活動を丁寧に行うようにしている。しかし、これまで自分が行ってきた鑑賞活動には次のような課題がある。

- 視点が明確でないため、表面的な感想を伝え合うだけで、表現者の達成感や鑑賞者の学びが少ない。
- よさを感じ取る視点が、「○○がうまい」、「○○がリアル」など、見た目の巧みさに偏る傾向がある。

よさや美しさを伝え合う楽しさを味わったり、製作過程の思いを共有したり、表現者が自信をもったりする鑑賞活動にするためには「色・形・構図などからどんな思いが伝わってくるか」、「なぜ、そのように描いたか」など、鑑賞する際の多様な視点に気付かせる手立てが必要である。

そこで、多様な視点で表現者の思いや表現のよさを感じ取れるよう、鑑賞の視点に気付かせる活動を行ってから、次の手順で合評会を実施した。

①自分たちの作品や美術作品を活用し、鑑賞の視点に気付かせる。
②自分の作品の紹介をする。
③友達からの評価（見つけたよさの発表）
④教師からの評価（思いに沿った評価、技法の紹介）

また、達成感を味わえるよう、一人一人に教師からの評価も行った。思いが実現できたことを具体的に賞賛したり、表現過程のエピソードを紹介したりするなど、自信をもたせるようにした。

実践①：見つけよう、いろとりどりの メッセージ（5年）

文化祭に展示する絵画作品が完成した後、合評会を実施。合評会のはじめに、次のような鑑賞の視点に気付かせる活動を行った。

> 文化祭に展示した子どもの作品、名札のコメント、友達からのメッセージが、ワークシートにランダムに並んでいる。絵とコメントとメッセージを線でつなぐ。作品とそこに込められた思いの結び付きを考えることで、表現の意図に気付かせる。

作品と思いの結び付きを考えることで表現の意図を感じ取れることに気付いた。視点が明確になったことで、その後の鑑賞活動では、作品から伝わる思いに沿ってよさを感じ取り、発言する子どもが多くいた。また、友達からのメッセージを読み、作品に込めた思いが伝わっていることに喜びを感じる子どももいた。

実践②：見に行こう、みんなの心のびじゅつかん（6年）

実践①と同様に合評会を実施。次のような鑑賞の視点に気付かせる活動を行った。

> 「ダンス」をテーマにしたルノワールの2枚の絵を提示。表現の違いや伝わってくる思いを考え、題名をつける。「図書館」をテーマに描いた2人の子どもの作品を提示。表現の特徴や違いから、表現の意図に気付かせる。また、同テーマでも、思いが違うと表し方が変わることにも気付かせる。

【　　】のダンス（ルノワール）

【　　】のダンス（ルノワール）

同じテーマでも、思いが違うと表し方が変わることに気付いた。また、「本が２冊描いてあるから、本が本当に好きだということが伝わる」というように、表現の特徴から表現者の意図を感じ取ろうとする発言も増えた。

■ 成果と課題

鑑賞の視点が明確になり、発言が見た目の巧みさに偏ることなく、「顔の色から一生懸命さが伝わる」など、表現の意図に沿うものとなった。よさを感じ取る視点が増え、「絵を見る構え」が形成された。表現者は、思いが伝わったことに喜びを感じ達成感を味わうこともできた。ただ、本実践は鑑賞の視点に気付かせるために教師の意図が強く働いている。自然に子どもが共通点や違いへ目を向けるような手立て（しかけ）の構築が必要である。

家庭との連携を深め、造形活動への意欲を高める

栃木県　宇都宮大学教育学部附属小学校
大　塚　智　大

■ 提　案

子どもたちは、かいたりつくったりする造形活動に対してとても意欲的である。想像力を存分に発揮してのびのびと活動に取り組んでいる。そして、その中でよさの認め合いを自然に行えるようにしていくことが一人一人の自信につながり、より意欲的に活動に取り組むエネルギーとなっていく。今回は学校だけでなく、家庭との連携によって、子どもたちに自信を持たせ、造形活動への意欲を高めていこうと考えて下記のような活動を設定してみた。

○ 家庭との連携を生かした授業実践

「まほうの手ぶくろをつくろう」2年

こんな魔法が使えたらいいなという思いをふくらませながら、手ぶくろにフェルトや身辺材を接着してつくっていく題材である。

題材の開始にあたり、必要な材料の準備についての協力を図工通信で家庭にお願いした。同時に子どもたちには、どんな材料が必要なのかを考えるようにした。

家庭の協力により、自分の使いたい材料を持ってきた子どもたちは、イメージをさらに発展させて造形活動をスタートすることができた。そこでは、自分が持ってきた材料の使い方を友達に一生懸命に伝えている姿も見られた。

製作に入ると、作品づくりに没頭していた。配られた手ぶくろに思い思いの形にフェルトを切り、ボンドで接着していく。身辺材も特徴を活かして接着することができた。製作していくにつれてさらに必要な材料が出てきて、次の時間までの間に新たな材料を探して持ってくる子どもも見られた。そこには少なからず保護者の協力があった。

子どもたちの製作の様子については、図工通信を通して家庭に伝えるようにした。活動の具体的な様子やがんばりのすばらしさを伝えることで、保護者に関心を持ってもらうことができた。

製作が進むにつれて、子どもたちはうれしそうに手ぶくろを眺めたり、手にはめたりしていた。中には、早く持ち帰って家族に見せたいという声も聞かれた。

完成時には、互いに作品を鑑賞し合いよさを認め合うことができた。作品の写真を入れた作品カードをつくり、作品を持ち帰った時に保護者からのコメントを記入してもらった。子どもの作品について家庭で話し合い、よさや頑張りを認識して自信を持てるようにした。

■ 成果と課題

(1) 成　果

材料の準備物だけでなく、作品の製作の様子を家庭に発信したことによって、保護者に造形活動に対する関心を持たせることができた。家庭において子どもと保護者とで作品についての会話が行われるようになり、よさが認められる機会を増すことができた。

また、作品カードに保護者からのコメントを記入してもらったことで、子どもがコメントを読んで喜びを感じるだけでなく、家庭で認められたことで自信を持たせることができた。

この実践を行ったことで、自分の作品に対する愛着を強く持つことができるようになった。そして、家庭においても自分が作品を認められたことで、自分の製作活動に意欲的に取り組むことができた。このように、家庭と協力して子どもの意欲を高め、自信を持たせていく支援を繰り返し行っていくことで、子どもたちの心を豊かなものにしていくことができた。

(2) 課　題

図工通信を中心に材料の協力をお願いしたり、コメントを書いてもらったりしたが、家庭によって難しい部分もあった。家庭の状況にも考慮しつつ、準備物を学校でも用意しておくなど、学校と家庭の両面で補い合いながら、子どもたちの造形活動をサポートできる体制をつくっていきたい。

分科会 8

伝え合うよさを感じる題材と展開

長野県　長野市立柳町中学校
千　原　　厚

■ 提案発表の内容の要旨

筆者は、２学年のデザイン学習として、長野市のよさをとらえ、それを単純な形や色で他者に伝わるよう表現する技能の育成を願って本題材を設定した。その過程で、善光寺界隈に住む長野市民らしい温かなおもてなしの心を育み、その心を大切にしていく市民になってほしいと願った。

始め、和菓子をそっくりにつくる活動に取り組んだ生徒達は、「オリジナルをつくりたい」と願った。そこで教師は、地元和菓子店の社長から和菓子についての説明と社長が和菓子に込める思いなどを聞く機会を設けた。生徒達は、客に伝えたい趣を単純な形や色で分かりやすく表すことが大切であることを知った。和菓子店社長からさらに、「アイデア豊かな季節感あふれる和菓子を待っています。」と言われ、学習のねらいを理解し、表現する意欲を高めた。

生徒達は、季節を表す言葉から風景を想像したり、四季での思い出を級友と語り合ったりする中で、思い出に残る自然の景色を頭に思い描き、近所の丘で見た澄んだ夜空と月、雪解けで芽を覗かせた若葉を見た時の感動などを和菓子にして和菓子を食べるお客さんに伝えたいと考えた。

シルキークレイに絵の具等を加えて願う色をつくっていくが、なかなか願う色がつくり出せなかった。しかし、和菓子店社長から、「色づくりが一番難しい。いろいろな色で試してみよう。」と助言されたり、教師や級友と色について相談したりすることで、加える色の種類や量を吟味したり、体重をかけて粘土をこねたりして、願う色をつくり出していった。和菓子が出来上がると、生徒達は、「校外のどこかにも展示して、長野市のよさを多くの人に伝えたい。」と、校外に展示する機会を求めた。そこで、県内外からも多く人が来る善光寺燈明祭りに展示しようと、作品に込めた思いや表現の工夫点を書いたお品書きもつくり、善光寺の宿坊内と仲見世通りの和菓子店前に展示した。展示の際は、お店の方々と見え方や光の当たり具合などを相談しながら展示した。

和菓子店社長と相談しながら作品を置く器や紙の質や色や形を検討する生徒達

色のバランス等を考えながら展示する生徒

見に来た方と思ったことを伝え合う生徒

休日に、作品を見に来た生徒は、お客さんに作品を紹介したり、感想を聞いたりした。後日、お客さんから寄せられた感想を読んだ生徒は、「多くの人が、僕達の和菓子に込めた思いを知って、長野市のイメージがよくなったみたいで嬉しい。自分の存在が多くの人に分かってもらえたことも嬉しい。」、「自分達の作品で、地域が柳中カラーになった。長野の冬は曇ったりしているけれど、僕達の作品の鮮やかなカラーで長野に来たお客さんの心が明るくなったと思う。これからも美術でいろいろな人の気持ちを明るくできたらいいと思います。」と感想を書き、題材を振り返った。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

①願う色をつくるために、加える色の種類や量を感覚的につかみ、つくり出そうと試行錯誤することに喜びを感じる生徒が多くなってきた。

②多くの地域の人々に自分の思いを作品で伝えたいと願う生徒が育ってきた。また、地域の人々と思いを共有できたことに喜びをもち、作品を他者への伝達手段の一つと捉え、人に伝わりやすいデザインを追求する生徒が育ってきた。

③表現が人々の心や地域を明るくでき、また、自分と地域の人々とがつながったことを感じ、美術の力で地域創造に参画したいと思う生徒が育ってきた。

※②③は美術科発展の方向性の一つだと考える。

⑵ 課　題

◉　カリキュラムに位置づけるためにも何をねらいにして展示を行い、評価をどうするのかを明確にする必要性を感じる。

◉　事前の何度かの打ち合わせや人とのつながりが必要である。準備が簡略化され、どの地域でも誰でも実施できるように一般化されることが、連携した題材を発展させるには必要だと考える。

分科会
8

地域の「ひと・もの」を生かした造形活動の取組

新潟県　見附市立葛巻小学校
高　野　久　昭

■提　案

本取組の提案を以下に示す。

① 地域の素材を題材に利用する。
② 地域の施設を展示に利用する。
③ 地域の人たちに作品を紹介する。

ところで、地域を生かそうとすると次のような問題や悩みが生じる。

- 連絡を取ったり調整したりするのが面倒だ。
- 学校でできることをわざわざ地域の方を呼んでやらなくてもいい。
- 計画を立てたり実施したりすることがいろいろと煩わしい。できればやりたくない。

できれば地域とはかかわらずやっていきたいと思う人は多いだろう。しかし、学校は地域の中にあるわけだから積極的に地域の人材や施設などを使わなければならない。多くの地域の人たちが学校教育に参加する現在では地域を外した活動は考えられない。地域の援助・協力を学校教育に生かすことが要求されている時代なのだ。

では、地域の様々な要求をどのように教育活動にかかわらせていけばいいのか。「ぬのから生まれた」という単元を通して次の実践を行った。

① 布や古着などを使って遊ぶ。
② 製作カードを書く。
③ 製作に取りかかる。
④ 作品紹介のポップ作りをする。
⑤ 展示の仕方を考えて試してみる。
⑥ 展示会場で準備をし鑑賞し合う。
⑦ 地域の方に作品紹介をする。

当校の所在する見附市は織物・ニットの町として栄えた。現在では数十の会社が残るだけとなったが市民には伝統産業としての誇りがある。子ども達は前年度にまち探検としてニット工場を訪れている。自分たちの住む町は伝統産業であるニット産業で支えられていることを知った。今回の取組ではそのニット工場で廃棄される多くの布を利用させてもらった。もちろん基本的には家から持ち寄った布や古着であるが、ここにニット工場からの布が加わるとさらに彩りが添えられ表現も広がった。

次に公共施設を展示の場とした。通常は教室か廊下に展示をするが今回は「ネーブルみつけ」という公共施設を利用した。いくつかの店舗、スポーツ施設などがあり多くの市民が集う憩いの場になっている。ネーブルみつけに来場する人たちに作品を見ていただき、さらに展示初日には地域の方々に作品紹介を試みた。子ども達は恥ずかしがらずに意欲的に地域の方を見付けて声をかけて作品を紹介していた。訪れた方の感想を以下に示す。

- 布の使い方が皆さん工夫されていて感動しました。アイデアたくさんの作品ありがとう。
- 布の特徴を考えてできた作品。どれも素晴らしいものでした。また作品展をして下さい。
- 布と材料を組み合わせてともてかわいらしく上手に作品を作っていると思いました。グループの作品紹介では初対面でも目を見てはっきりと説明する姿を見てびっくりしました。

■成果と課題

地域を巻き込む取組は大変である。相当に疲れる。しかし、これは教師の都合であって子どもにとっては楽しくそして地域の方々からたくさん褒めてもらえる。学校内だけではできない様々なことを体験できる。子どもの意識も変わり作品に対する取組方も大きく変わる。保護者も一緒になって展示会に足を運んで見てくださる。保護者からも多くの感想をいただいた。地域を巻き込んだ取組をどの学年でも取り組んでみてもいいだろう。課題は我々教師にある。面倒がらずに地域を取り込む勇気をもち考え方を変えることが必要だろう。

私たちがおすすめする1枚の絵
～千葉市美術館所蔵作品より～

千葉県　千葉市立大宮中学校
阿　部　真　紀

■提　案

千葉市の市教研の中の美術館との連携グループでは、一昨年は、美術館所蔵の作品の中から３つのコレクションごとに30点ほどを選び、写真で生徒に紹介して、その中から気に入った作品を選ばせるという授業を行ってきた。この年には美術館の企画展で、各学校の生徒が選んだ作品を実際に展示していただいた。また、本校では、千葉市美術館が行っている「小・中・特別支援学校鑑賞教育推進事業」による鑑賞教室にここ４年間参加し、ボランティアの方に解説していただきながら鑑賞するなど、美術館と協力して鑑賞の授業を行ってきた。

そのような中、昨年８月に試験的に千葉市美術館所蔵作品のインターネット上での公開が始まった。すべてではないが、美術館にどんな作品があるのかネット上で知ることができるようになった。

今回は、そのシステムを利用して、班ごとに紹介したい作品を選び、発表することにした。

また､作品が生徒にあまり馴染みのない「浮世絵」のため、浮世絵に関して事前に学習し、それを踏まえたうえで作品選びができるようにした。

事前学習では「浮世絵とは何か」「どのような種類があるか」「浮世絵の果たした役割は」など、鑑賞の切り口、入り口になるような学習をおこなった。このことによって、生徒が浮世絵とはどのようなものかという認識を持ち、そのうえで作品から情報を読み取り鑑賞していけば、より深い学習ができるのではないかと考えた。

□授業内容

目　標

- 千葉市美術館所蔵作品に興味を持ち、どんな作品があるかを知る。
- 浮世絵に込められた情報を読み解く面白さに気づく。
- 浮世絵の良さや美しさを感じ取ることができる。

内　容

- 浮世絵とはどんなものであるか知る。
- ネット上の千葉市所蔵作品（浮世絵）から各自１枚紹介したい絵を選ぶ。
- 班内で話し合い、１枚に絞る。作品、作者について調べたり、感じたことをまとめる。
- 班ごとに発表する。

■成果と課題

今回の授業は、教師が一人で授業を組み立てるのではなく、美術館の学芸員と話し合いながら双方の視点で授業を作っていったことが良かった。

また､授業で美術館に行けなくても､ネットを使ってだれでもどこの学校でも授業が展開できるという点も良かった。生徒は、本物を見られるわけではないが、この授業を通して浮世絵の見方を知り、千葉市美術館や作品に少しは興味を持たせられたのではないかと考える。実際、授業後、「浮世絵についていろいろなことが分かった」「千葉市美術館にこんな作品があるんだということが分かった」「美術館に行ってみようと思った」などの感想があった。また、将来本物を見る機会があった時に今回の授業が活きてくると思われる。

今後の課題としては、ツールとしてのデータベースをより使いやすいものにしていくことが必要である。また、予算の関係もあるが、美術館と学校との連携はたくさんの可能性を秘めているので、今後も美術館の学芸員の方に協力をいただきながら、美術館と学校が連携してできる鑑賞の授業を考えていきたい。そして、千葉市美術館への関心を高め、郷土の美術に対する理解と愛情を深めていきたい。

分科会
9

横浜美術館との連携「夏休み子どもフェスタ」アートティーチャーズサポーター

神奈川県　横浜市立下瀬谷中学校
小　林　重　之

■ 提案発表の内容の趣旨

私たち横浜市立中学校教育研究会美術科は８年前から横浜美術館と意見交換を続けてきました。「アートティーチャーズデイ」という教職員のための学芸員による企画展のレクチャーとギャラリートークが年４回実施されるようになりました。５名から始まった「アートチィーチャーズデイ」は現在小中高の先生十数名が集まる美術館の学校連携のプロジェクトになっています。また、関ブロ・全国大会では、会場提供や奈良美智さんとの美術館を使った鑑賞授業実現への協力を受けることができました。

その後も美術館と意見交換する中でいつも平行線の案件がありました。それは美術館のワークシートでした。教師側としては単に楽しいゲームのようなものではない、鑑賞が深められるワークシートを作ってほしいと考えていました。特に夏休みに美術館での鑑賞レポートを課題としている学校も多く、その課題の出し方にも問題はありました。美術館側からは、宿題のお手伝いはしない。まずは、夏休み前に「アートチィーチャーズデイ」に参加し作品を見てほしいと要望がありました。

２年前から美術館との合同研究会を立ち上げ、窓口としての互いの担当者をはっきりさせました。そして､美術館･子どものアトリエが実施していた「夏休み子どもフェスタ」と言う幼児・児童対象の対話による鑑賞教室を中学生まで広げるプロジェクトの運営に取り組みました。ここまでの経緯とこのプロジェクトを美術館との連携の提案とします。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

◉　１年目の2009年は子どものアトリエスタッフ、学芸員研修生と私たち研究会の有志でこのプロジェクトに取り組みました。２年目の2010年は市美術科全会員にも参加を呼びかけ、子どものアトリエスタッフ､美術館のインターン､ボランティアの方とともに運営しました。少人数の有志から始めることが連携を続けるうえで重要です。

◉　鑑賞作品は常設展示室のシュルレアリスム作品と日本画にしぼり、２年目はイサム・ノグチや常設展示の彫刻作品も入れて鑑賞の対象を広げることができました。

◉　美術館と意見交換を続ける中で、２つの連携プロジェクトが発案されたことは大きな成果である。

⑵ 課　題

◉　美術館は「連携」という扉を開けた。より多くの美術科教師がアートティーチャーズサポーターに一度でも参加して、市民の美術館としてその運営にかかわることが必要である。また、自らの鑑賞力が深められることは言うまでもない。

◉　夏休みの美術館での鑑賞課題を設定する時には、ルールとマナーについても指導が必要である。

分科会 9

学芸員に挑戦！
～子どもが選ぶ名品展～

新潟県　長岡市立上組小学校
堀　田　祐　嗣

■提　案

当校では、『こだま美術館』という学校独自の美術館があり、毎年６年生が総合的な学習の時間に年間を通して、子どもたちが企画・運営をすることが伝統となっている。そこで、今回は例年行われている企画展だけでなく、総合の年間目標である「表現すること」について学びを深めるために、新潟県立近代美術館と連携して実践を行った。

この連携プロジェクトでは、美術館の企画展と常設展の鑑賞をしたり、学芸員の講話を聞いたりすることから、最終的には子どもたちが学芸員として一般のお客さんに作品解説をする活動を行った。子ども学芸員が、作品への知識や思いを深めていくためにアートクイズをしたり、「こだま美術館企画展 近代美術館の名品レプリカ展」を開催したりするなど、様々な活動を行った。

県立近代美術館常設展「近代美術館の名品展」(2010年12月2日～2011年1月23日会期）に、子どもたちが選んだ所蔵作品（９点）を一般のお客さんに、子ども学芸員の視点で作品の見どころや感想を語るギャラリートークを行った。入場料を払って来館するお客さんに対してプロの学芸員として対応するために作品や作者について調べ、自分たちなりの視点で作品を読み解いていった。さらに、提示するキャプションの解説文を考えたり、ポスターやチラシなどを自作し、配布をしたりする中で作品や作者について思いを深めていった。また、来館者にアンケートを配布し、率直な感想をいただき、3ヶ月間継続したプロジェクトを振り返った。

■成果と課題

⑴ 成　果

◉ギャラリートーク形式の作品解説

ギャラリートークをすることにより、来館者の様々な作品の読み取りを聞くことができたため、学芸員は作品の多様な見方があることを再認識することができた。また、来館者とのギャラリートークから、子どもたち自身も新しい視点をもらうことが多く、作品の見方が変容し、その後の解説に生かしていく児童も多かった。

◉自分の思いを重視した作品解説

作品の時代背景や作者についての知識だけを集めた作品解説はせずに、子どもならではの読み解き（思い）を中心とした作品解説を行った。学芸員は、作品を読み解く（見る）楽しさや来館者と作品について意見交換をする楽しさを実感することができた。

◉複数回実施することの有用性

２回実施することで、担当作品の思いや考えを深め、効果的な活動を行うことができた。１回目の作品解説では、調べた知識や用意した解説文を丸読みする感じが見られたが、２回目は原稿にとらわれず、目の前にある作品と向き合い、自分が抱く作品への思いを来館者に伝えることができた。

◉作品の見方の変容

活動後に子どもたちが書いた振り返りシートには、「作者の気持ちを考えて作品を見るようになった」「この作者の他の作品についても調べてみたくなった」などと記述されてあり、作者･鑑賞者･運営者とそれぞれの視点に立って鑑賞するように変わっていく姿が見られた。

⑵ 課　題

◉来館者の不足

『新潟県ジュニア美術展覧会』を観覧する子どもたちを引き込み、子どもが子どもに名画を解説する姿を期待したが、天候不良や宣伝不足から来館者数が予想より少なかった。

◉複数回実施することの必要性

作品解説の回数を重ねる毎に、子どもたちの作品に対する愛着や読み解きが深まってきた。また、もっと調べて解説をしたいという気持ちの中でプロジェクトが終了したため、あと数回実施することができたら、さらに学びが深まったと思う。

光とかかわり、自分の世界を つくりだしていくプロセス

東京都　渋谷区立広尾小学校
石　田　智　春

■ あの日からわたしたちは

今回提案する授業は、昨年の12月に行った授業である。東京都図画工作研究大会城南大会で、光を使った造形活動を６年生で行った。大会のテーマである「さがす・みつける・つくりだす」子どもの姿を追い求めて、分科会で話し合い、子どものプロセスが短い授業の時間内で見られるのではないかということで、光という題材にたどりついた。

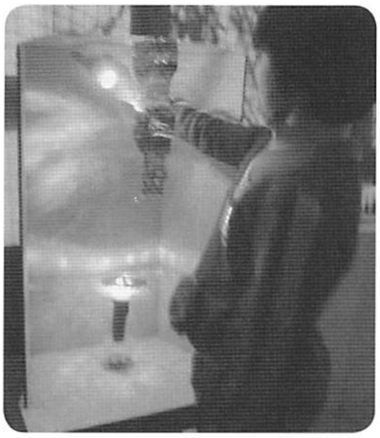
あの３月11日の震災以降、光に対しての価値観の転換があったのではないかと感じている。夜でも光あふれる街中、光は際限なくあるものだと誰もが思っていた。しかし、そうではなかった。東京では計画停電が実施され、信号さえ光らなくなった夜の静寂。恐怖さえ感じた人がいるという。しかし、その一方で月の光の美しさを改めて感じたという人もいた。環境の中での光の価値とはなんだろうと考えるきっかけになったのではないだろうか。

授業では、まず日常の中での光と自分と心との関係が意識できるような投げかけをした。そして1本の懐中電灯と５つの材料を選んだ。白段ボールで作ったマイスペースでどんな表現ができるか探求する時間。教室を暗くして試行錯誤を始めると、授業者の私や参観者でさえ、声を出すのもためらわれるほどに静寂が空間を包んだ。

驚いたのは、場所の関係で２つの教室に分かれて活動していたところ、私が教室を行き来している間に子どものイメージがどんどん変化していることだった。たとえば、Ａ君はくるくると落ちてくるＣＤに光をあてて飛び散り変化する光に夢中になっていたが、最終的に鑑賞の時点では青白い光の世界になっていた。刻々と変化する彼のイメージの一端を見たような気がした。

■ 成果と課題

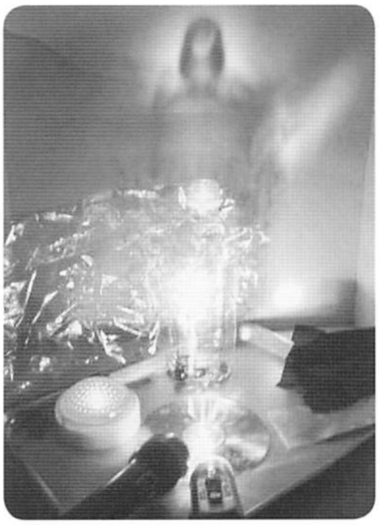
⑴ 成　果



すべてのプロセスを見とるのは本当に難しいことだが、子どもたちが活動のプロセスの中で、自分の内的世界（今までの経験としての光とそれに伴う感覚や感情）と対象（光源や材料）との関わりを発見し、編集・構成（光と材料との組み合わせ方や光の表情をとらえようと試行錯誤）しながら、新たな意味や価値（光の現象からみつけたこと・感じたことに思いを重ねて新たなイメージ）を見つけ、つくりだしていく姿が垣間見えたことが成果である。一人一人のプロセスの軌跡は確実に子どもの中に残っているということが実感できた。

⑵ 課　題

あっという間に活動の時間が過ぎ、鑑賞の時間はあまり取れなかったのが残念だった。自分の世界にひたっていた子どもがお互いの光の世界に出会った時に、どんな感想をもつのだろう。鑑賞の方法について、映像や写真を自ら記録し、どんな光ワールドになったか説明するなどもっと工夫できたのではないかという点が課題である。



分科会
10

つながり・深まる・箸（橋）渡し
ポートフォリオ的学習カードからみとる生徒の変容

茨城県　水戸市立笠原中学校
角　谷　由　美

■ 提案発表の内容の要旨

箸は、日本の食習慣に欠かすことのできない最も身近な工芸品の一つである。本研究は、その箸に着目した第１学年の題材である。

前年度は題材名「オンリーマイ箸」で自分の箸と箸置きを制作し、給食の時間、その後家庭で使用した。自分で制作した手作りの箸を使用することで、「使う」という工芸表現のよさを体感した。

今年度は、題材名「○○さんに贈る箸」とし、贈る相手を考えた箸と箸入れを制作した。制作したものを贈る活動を通して、家庭や地域の人とのつながりを深めていくことや、工芸の「用」と「美」をより深く意識させることができるのではないかと考えた。

ここでは、ポートフォリオ的学習カードを活用することにより、家庭や地域とのつながりの深まりや、社会とのかかわりの広がりなどについてみとっていくようにした。学習カードには、事前・事後アンケート、期末テスト、アイデアスケッチ、箸入れの試作、進度状況、完成作品の写真、贈った人へのレポート等、このカードを見れば生徒一人一人の学習の様子を再認識できるようにした。

事前のアンケートの結果から、自分で制作したものをプレゼントした経験のある生徒は全体の1/4に満たない。また、喜ばれたり、愛用されたりしているものを制作した経験は全体の１割もなく、身近なものの中に機能美を感じるものがあると答えた生徒は全体の３割という実態だった。

そこで、まず、贈りたい相手を決め、どんな思いで、どんな箸と箸入れをつくりたいかを考えた。また、期末テストの時期が、この題材の導入時と重なっていたので、道具の使い方や箸や包む形に関するリサーチなどをテスト内容とした。そして、贈る相手の手の長さを測り、理想的な箸の長さを割り出し、材質の堅い黒檀を小刀で削り、紙やすりで滑らかにしていくことで、贈る相手への思いを深める活動を位置付けた。ここでは、相手への思いが、持ちやすさや機能美への意識の高まりとつながっていくことを期待した。仕上げに蜜蝋ワックスを塗ることで、しっとりとした光沢の箸に生徒たちは満足な表情を見せた。

さらに、この学習では、印刷所からいただいた様々な端紙を利用し、箸入れをつくる活動も位置付けた。身近なパッケージデザインをリサーチしたり、展開図を考え試行錯誤を繰り返したりすることで、機能的なデザインに目を向けるとともに、家庭にある包装紙なども再利用して、贈り手にあった箸入れを考えた。

最後に、心を込めて制作した箸をパッケージして贈った。相手の感想を聞いたり、相手からメッセージをいただいたりすることで、造形を通して思いがつながる喜びを感じ取ったり、身近なものに機能美を見出し始めたりした。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

◉家庭や地域との連携を通して

贈る相手を想定することで、造形活動の深まりがみられた。生徒たちは、贈った相手からの感想や事後アンケートの結果から、表現活動による人と人との繋がりを自覚できたと考える。表現活動を媒介にして家庭との連携が深まり、制作する喜びと今後の造形活動への意欲の高まりが生まれた。

◉学習カードの工夫を通して

ポートフォリオ的学習カードを活用することで、多角的な評価が可能となった。様々なデータをファイリングしたり、発想や学習の足跡を同時に書き込めるようにしたりしたことで、生徒の思考の変化や深まりの様子をみとる手がかりとなった。特に事前・事後の変容を自覚することができた。

⑵ 課　題

◉幅広い表現活動

デザインや工芸などの幅広い表現活動の複合題材であったため時間がかかった。特に、硬い木材を加工することや、パッケージデザインを考え展開図にする活動につまずく生徒がいた。今後は、堆朱の箸や粘土の箸置きなどへの展開も検討したい。

◉表現が生活の中に息づく授業の展開

教科学習の意味を感じたり、表現が生活の中に広がっていったりするような授業展開を考えていくことで、生徒が、生き生きと目を輝かせ美術の喜びを得られるような授業構成を考えていきたい。

分科会
10

ふるさとのよさを発信する動画制作

新潟県　三条市立下田中学校
瀬　戸　優　貴

■ 提案発表の内容の趣旨

中学校３年生を対象として、地域ＣＭ（本実践ではシティーメッセージと呼ぶ）をつくる実践を行った。シティ・メッセージとは「地域のよさを発信する動画」である。５・６人のグループごとに「下田の水」「下田の米」「ひめさゆり森林公園」「私たちの故郷、下田」「下田の笑顔」などのテーマを設定し、15秒〜30秒という短い時間の中に故郷下田のよさを表現した。

↑下田の名水「千年悠水」をテーマにしたＣＭ

グループ内では、監督・カメラ・編集・音響・ＡＤ・出演者など役割分担を行い、①題材の設定→②構想→③絵コンテ作成→

④配役決定→⑤撮影（ロケ）→⑥編集という手順で制作を進める。その途中で、グループ内、クラス内、ＣＭプランナーを招いてと、３回の発表会を行い、アドバイスをもらった。その中で自分の作品が人や社会にどのような影響を及ぼすのか、客観的な評価を得、作品の修正を何回も行った。

完成したＣＭは市内の公共施設で上映したり、新聞に載ったりし、地域の人たちの評価を受けた。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

- ◉ 動画を表現手段とすることで、より具体的に地域と関わる気持ちや姿勢が強まった。普段ＴＶでＣＭに親しんでいる生徒にとって、ポスターや写真等よりもとりつきやすかったと考える。
- ◉ 独善的な作品に陥らず、客観的・効果的に情報が伝達されるためにはグループ外からの、また、プロからのアドバイスという評価は有効であることがわかった。これにより構図やアングルも工夫することができた。
- ◉ 編集作業（映像やテロップの編集や音楽の挿入など）がパソコンを使うことで非常にスムーズに行え、アドバイスに基づいた改善を繰り返し、納得できる作品に仕上げることができた。動画の編集ソフトは「マイクロソフト・ムービーメーカー」である。
- ◉ 地域に発信し、反響を感じることは、次へのやる気の向上に一番効果的であった。

⑵ 今後の課題

- ◉ 生徒は機材やソフトの使い方に慣れるにつれてアイディアや改善案がより具体的に出るようになる。そのために二度づくり、三度づくりと制作を繰り返していくことが有効である。その時間と場を確保していくことが課題である。
- ◉ 撮影は場面によっていろいろな場所・時間となる。中学校においては生徒指導的な観点から、教師と生徒との約束事の確認や信頼関係の構築が不可欠である。普段より授業への明確な目的意識をもてるようにすることが課題である。
- ◉ 挿入する音楽は著作権に配慮しなくてはならない。曲によって一般に発信できないことがある。

分科会 11

美術文化とのかかわりで「よさ」が広がる造形教育

話したいことが自然にわき上がる「アートカード」を使った鑑賞活動

山梨県　甲府市立甲運小学校
佐　藤　清　美

■ 提案内容

豊かで自由な感覚をもっている子どもたちに、より多くの美術作品と出会わせたい。子どもたちが感じたこと思ったことを互いに伝え合い、認め合うコミュニケーションを促す中で、美術作品を見る楽しさを感じさせたい。そんな思いをもったときに、「アートカード」というものの存在を知ることになった。

⑴「アートカード」について

国立美術館所蔵の作品を手元で扱える大きさに縮小したもので、それらの「アートカード」と出会った子どもたちは、「ぜひ本物を見たい」という思いを鑑賞活動の中からもち始めた。そこで、もっと身近にある山梨県立美術館の作品にも親しませていきたいと考え、校内用の「アートカード」を作成し、それらを活用した鑑賞活動に取り組むことにした。

⑵ 子どもたちの実態

子どもたちは、実際に芸術家の美術作品を見た経験が少ない上に、作品をよく見るということもほとんど体験したことがないことがわかった。そこから、より多くの美術作品にふれることや見方などを知っていくとよいという実態が明らかになった。

また、活動を行った中学年の子どもたちは、比較的自分の考えや思いを伝える力は高まってきているが、他者の考えや思いを聞いたり、理解したり、互いに認め合ったりする点では、まだまだ経験が少なく、意図的に話し合う場づくりをして体験させていく必要性を感じた。

⑶ 活動を通しての様子

「アートカード」を活用してのゲームを通して、作品の細かな部分などを注意深く見つめる姿が見られるようになった。また、見方への関心ももつようになった。

活動を通して、自分の考えや思いをもち、積極的にそれらを他者に伝えている様子が見られた。また、他者の考えや思いを理由も含めて聞くことで、互いを理解していこうという場を多く体験できていた。他者に認められるという経験を通して、美術作品の「よさ」を感じ取るだけでなく、互いの感じ方や見方、考え方の「よさ」に気づく場にもなっていた。

カードを見つめる子どもたち

子どもの中には、その後の造形活動で、作品から見つけた表現を取り入れてみようとする姿も見られた。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

◉身近な美術作品の「よさ」への関心

活動を重ねることで、より多くの作品を目にすることができた。また、自分たちの身近に、多くのすばらしい作品があることに気づく機会となっていた。「アートカード」の作品の分野もさまざまなので、子どもたちの興味や関心も、一人ひとりの好み、感じ方や見方が現れて、それを子ども同士が知り合う場にもなっていた。

◉のびのびとした感覚の表出

授業では、子どもたちの自然な発想の中から、言葉だけでなく、ジェスチャーなどによるコミュニケーションの表出も見られた。また、子どもが「アートカード」から得た思いや考えを表現した折、他者と共感し合う機会を多くもたせることによって、個人内の鑑賞活動への広がりが期待できるのではないか。

⑵ 課　題

◉実態や目的に合わせたゲーム活動づくり

ゲームの方法は、学年やクラスなど、子どもたちの実態に合わせて、多様な形にかえて活動していくとよいことがわかった。また、高めていきたい鑑賞の力やコミュニケーションの力、その後につなげていく造形活動に合わせて、カードの提示方法、扱うカードの選択の工夫、グループでの取り組み方など、ゲームの形式を変容させて取り組んでいくとよいこと、「アートカード」の活用方法を広げていけるという可能性を確かめられた。

分科会
11

暮らしの中で美術の「よさ」を見つけ、話し合い活動で表現力を高める造形活動

埼玉県　深谷市立幡羅中学校
根　岸　由　紀

■ 提案発表の内容の趣旨

美術科の目標の中に「生活の中の美術の働きや美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養うこと」とあり、自分の思いや制作者の意図を読みとる力が必要になってきている。また新学習要領に言語活動の充実が明記されたことをうけ、班での話し合い活動を積極的に取り入れることでコミュニケーション能力を高めるとともに表現力を高め合わせたいと考えた。

本題材では身近なところにある美術を通し、自分たちの生活空間を演出することをテーマに「学校デコプロジェクト」と題し、教室表示を制作した。まず「表示＝看板」と考え、看板の持つデザイン性に注目し鑑賞活動を行った。看板は古くから身近にあり馴染みのあるものだが、よく観察してみると作られた年代によって様々な意匠を発見することができる。また、店の特徴を分かりやすくデザイン化し、店を象徴する役割を担っている。それらは生活を彩るデザインとして暮らしの中で生かされてきた。そこで、看板の鑑賞から自分たちの生活空間を振り返り、教室表示をより分かりやすくデザインすることを目標に制作を進めた。

最初に様々な種類の看板の写真を用意し、レタリングやデザイン等から、形の面白さや美しさを見つけ、それぞれのもつ「よさ」を発見する鑑賞会を行った。制作では最初に班員をそれぞれ4つのグループに分けた。班員は制作に沿った4つのテーマの場所に行き、それぞれのテーマを基に学び合いをおこなった(ジグゾー法)。学んだ内容はグループ内でシェアリングした後、班に戻りそれぞれのグループで集めた情報を交換し合いながら、自分たちの制作イメージを広げていった。話し合いのポイントは自分の考えを相手に伝えること、相手の意見を聞きまとめることが重要である。またグループ内で持つ情報が異なるため、一人の持つ情報が重要な鍵となってくる。これは話し合う場でも参加できないという生徒を少なくする狙いもある。

班での話し合い活動

アイデアを出し合い工夫を凝らす

言語活動を制作に取り入れたことにより、お互いの意見やよいところを認め合うことで、幅広く発想を出し合うことができるのではないかと考えた。また、制作の最後に作品を実際の校内表示に用いることで、生徒の創造表現を高める活動ができるのではないかと思いこの実践を行った。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

◉暮らしの中での「よさ」を見つける。

生活の中で意識してみることはないが、改めて観察することで、自分たちの暮らしのすぐ側に美術文化があることを意識させることができた。また自分たちの学校環境を自分たちの作品で飾ることで、自分たちにも「できる」という感覚を持たせることができた。生徒たちの感想からも「作品が飾ってある教室に行くのが楽しみ」という感想があった。

作品を設置

◉話し合い活動でお互いの「よさ」を見つけ出す。

話し合いの時間をじっくり取ることにより、自分の意見を積極的に発言できる機会を設けることができた。グループで話し合うことで自分ではなかなか出ないアイデアも、ちょっとしたひと言から周りの意見を巻き込み、さらにアイデアが広がった場面が見られた。また自己評価カードに「話し合ってよいアイデアが浮かんだ」と書く生徒もいた。話し合い活動に対しても肯定的に捉えている生徒が多く、意欲の向上にも繋がった。

⑵ 課　題

課題として感想を文にして書くことが苦手と感じている生徒が多数いることに注目したい。今回の実践ではコミュニケーションに重点を置いたが、次のステップとして表現の幅を広げるための言葉を提示し、相手に伝える力を身につけさせたい。また、話し合いが苦手な生徒に対する支援についてもさらなる工夫が必要だと考える。

分科会
11

美術文化についての理解を深め，自分の表現に生かしていく授業

新潟県　新潟大学教育学部附属新潟中学校
稲　生　一　徳

■提　案

新学習指導要領において、第２学年及び３学年の内容であった「我が国の美術文化に関する鑑賞」が、全学年において「Ｂ鑑賞」の内容となり、特に、第２学年及び３学年の内容として「美術文化の継承と創造への関心を高めること」が加筆された。そこで、本題材では、県立近代美術館での鑑賞活動や鑑賞したことを交流する活動を通して、国宝である「菩薩半跏像」のよさや美しさを実感して、新たな価値をつくりだし語ることができる生徒の姿を目指した。

題材のキータームを以下に示す４点として授業を構想した。

「芸術的価値」「対話型鑑賞」「国宝の鑑賞」「美術館の利用（学芸員との連携）」

実際の学習活動は、下記の通りである。

①「ダヴィデ像」(アカデミア美術館)と「金剛力士像」(東大寺)とを対比して感受したことをワークシートにまとめる。運慶とミケランジェロの表現意図をワークシートにまとめる。
②複数の仏像のカード（複製写真）を見て、自分なりに分類の観点を挙げる。(年代・素材・寺院・表情など)
③資料集の「仏像の見方」を基に、複数のカードを「如来」「菩薩」「明王」「天部」に分類する。
⑤実際に美術館で「菩薩半跏像」（中宮寺）を鑑賞して、芸術的価値や感受した魅力を、鑑賞レポートにまとめる。
⑥「菩薩半跏像」の芸術的価値を語り合い、ワークシートにまとめる。

対話型鑑賞場面

特に、学習活動⑥において、次の２つの手だてを講じて、前述した目指す生徒像の具現化を検証した。

〈具体的な手だて ア〉
世界三大微笑の作品を提示する。
〈具体的な手だて イ〉
対話型鑑賞法による活動を組織する。

手だてア､イによる働き掛けによって､生徒が「菩薩半跏像」の芸術的価値を語り合う中で、新たに見いだした芸術的価値をワークシートに記述することが、思考力・判断力・表現力を高めている姿とした。次に、「菩薩半跏像」の表情と、対比の対象となる西洋の作品の表情から芸術的価値を語り合うために、次の発問を行った。

「菩薩半跏像」の表情は､「モナ･リザ」や「スフィンクス」とともに世界三大微笑と言われている。それはなぜか。根拠を基に述べ合いなさい。

対話型鑑賞法による活動における発話記録から、生徒は「モナ・リザ」と「菩薩半跏像」との表情を観点に対比し、共通する見え方を実感していた。

同様に、「菩薩半跏像」の表情の見え方、感じ方が人によって多様であることを、生徒の発言により裏付けられた。具体的には、顔の部分の彫りの深さと表情との関係に着目して、そのことを根拠に「菩薩半跏像」の芸術的価値を語った。これは、仲間の芸術的価値を整理・統合した内容であった。

次に、このような作品にするための制作する立場からの工夫について、授業者の問いに対して、生徒は、母をモデルに感情移入したことを根拠に語った。

お身代わりの鑑賞場面（新潟県立近代美術館）

■成果と課題

芸術的価値を交流させる対話型鑑賞法は、美術文化についての理解を深め、思考力・判断力・表現力を高めることには有効であった。一方、意図的な小集団の編制による交流活動を組織することや、自分の芸術的価値を整理・統合しやすいワークシートを工夫することが課題である。

分科会 12

美術文化とのかかわりで「よさ」が広がる造形教育

美術作品とのかかわりを深め、よさが広がる造形活動

新潟県　私立中越高等学校
北　村　和　則

■提　案

水彩画の授業の最初に、「水彩画を描く際、鉛筆で下描きするまでは良いが、色を塗ると失敗する人はいますか」と問いかける。すると、教室内の少なくとも半数の生徒は手を挙げる。その後、「失敗の最大の理由は、色を塗るからです」と答える。一見すると、『禅問答』のようなやりとりであるが、私は、毎年それを繰り返している。

日本の美術には、日本画や浮世絵に代表されるように、古来より輪郭線の文化が根強い。また、随分と以前から、小学生の描くポスターの原画には、よく細書きのサインペンが使われているようである。「消えない」という油性の利便性によるものであろうが、「消えない」ということ自体に問題が無いわけでも無いと感ずる。

ディズニーのカトゥーン（アニメーション）や、日本製でも昨今のフル・デジタルの３Ｄアニメーションには、輪郭線の痕跡は殆ど感じられない。

そもそも「輪郭線」とは何か。極論すれば、それは国境などと等しく、人が便宜的に定めた物の一つに過ぎない。大変おこがましい言い分ではあるが、私は絵画指導を先ず、「生徒を輪郭線から解放する」ことから始めているつもりである。

着色する絵画作品において、一般的に下描きに使用する鉛筆や木炭などは、色を濁らせると言う点で、画面上の「邪魔者」であり「不純物」に過ぎない。そのような意味では、「鉛筆デッサン」と「鉛筆画」などは、厳密には別物である。

また、現在の自由画教育に根ざした指導の潮流には、光や色に関する科学的知識がまだ不足気味に思える。これもまた極論であるが、家で一人でも出来ることを、授業でやる意味はない。「総合的な学習の時間」登場以前から元々、美術と言う教科は、教科横断的要素を持っている。そして美術に限らず、知識があってこその基礎基本であり、基礎基本があってこその応用、発展である。

一定程度の正確な自然科学上の知識がなければ、美術史も、その本質をより深く理解させることはできない。より高いレベルで個性を獲得させる意味でも、最低限の科学的知識は不可欠と考える。

■成果と課題

(1) 成　果

◉三原色による水彩画（絵画／デザイン）

赤、黄、青、白、黒と最低限の色に限定し、混色の回数を増やすことを促す。例えば、何十、何百色の色鉛筆を与えても、大抵の場合、使用する色は限られる。混色して作った経験のない、言わば素性の知れない色は、本質的に使いこなすことが出来ない。「色の経験値」を上げることでのみ、より多彩な色を発見、獲得させることができる。また、絵画作品制作においては、下描きを一切禁止する。下描きの作業を削除することで、着色に対する集中力が、より長く持続できるようになる。

◉両面折り紙による「反転切り離し」

着色が不要で、貼り付ける前なら試行錯誤が容易に出来る。画面上の色と形のバランスを復習し、つつ、さらに深く考えさせられる。

◉色面構成「黄金分割」

自然界に存在する黄金比を、作品鑑賞と併行しつつ理解させることで、生物の進化など自然科学分野にも興味を持たせる。また、人工的要素(個々のデザイン)を付加させることで、普遍的な美的要素とのコラボレーションを体験させられる。

(2) 課　題

◉　デザイン作品全般において、まだまだイメージを発展させきれていない。例えば、星型やチューリップの形のような「記号化」された要素を未だ十分に排除できていない。

◉　絵画作品において、特に複雑なモチーフでは、まだ色の反映が全体的に不十分である。

分科会
12

多様な方法を生かした版画制作

新潟県　新潟県立中条高等学校
鈴　木　　晃

■ 提案発表の内容の要旨

版画制作というと、生徒は「彫るのがめんどう」、「手が汚れる」といって興味を示さないことがしばしばあった。また生徒の版画に対するイメージは木版のイメージが根強くあまりいい印象はないように感じていた。そこで版画制作に気軽に取り組めるように、製版や刷りに多様な方法を試みてきた。その指導のポイントは次の４点で、以下のようなステップを通して実践した。

○指導のポイント

1　はがき大の小作品とする。
2　紙やゴムなど、容易に製版できる素材を使う。
3　可能なかぎり凸版、凹版での印刷をする。
4　グラデーションや色分けなど、インクの付け方を工夫して刷りのバリエーションを広げる。

○指導のステップ

ステップ１　紙によるドライポイント（２Ｈ）
①版　材　ドライポイントプレート（紙）
②製　版　オートマティスムの方法で思いつくままニードルやロッカーなどで版面に傷をつけたり、剥がしたりして版を作る。
③刷り１　硬質ゴムローラーで油性インクをつけプレス機で刷る。（凸版刷り）
④刷り２　版の凹部にインクを詰め布で拭き取りプレス機で刷る。（凹版刷り）

ステップ２　コラージュグラフ（２Ｈ）
①版　材　ドライポイントプレート（紙版）、たこ糸、寒冷紗、砂、木工ボンドほか。
②製　版　自分のイメージに従って版材を木工ボンドで貼り付けて版を作る。
③刷　り　プレス機で刷る。（凸版刷り）

ステップ３　版画による年賀状の制作（３Ｈ）
「ステップ１」または「ステップ２」の方法で、年賀状を意識した版画制作をする。

○　この提案内容は前任校の中条高校第１学年での実践である。また、第２学年では一般多色ゴム版画の実践も試みている。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

◉　小品なので短時間で制作できる。また、いくつかのステップを通して、製版や刷りの違いによる表現の違いのよさを具体的に理解することができた。版画制作の導入的性格があり、次の本制作へとつなげる課題として有効であった。

◉　15年前から全日本年賀状版画コンクール（現在は全日本年賀状大賞コンクール）にステップ１からステップ３の作品の中から生徒作品を応募し（少ない年で100点、多い年で300点）、毎年思いのほか多くの入賞者を出し続けることができた。

第６回　年賀状大賞　　　第７回年賀状大賞

◉　中条高等学校では、２年連続版画部門で大賞を受賞することができ、新聞などでも報道され、地域に明るい話題を提供することができた。また、地元郵便局や福祉施設での作品展示にも発展し、地域との連携を深めることができた。

⑵ 課　題

賞を取ることが目的ではないが、生徒の創作意欲の刺激には有効である。しかし、指導者がいいと感じた作品が入賞しないことが多く、評価を含めて、悩みの種である。

分科会
12

学校行事、他教科と連携して「よさ」を広げる造形活動

新潟県　新潟県立高田北城高等学校
中　條　由　美

■ 提案発表の内容の要旨

本校の生徒は学習熱心である。しかし、日々の学習に追われるなかで、美術の授業に対する主体性が薄れているように思う。美術に限らず、「与えられた課題をやればいい」といった姿勢も少なからず見られ、残念に感じることがある。美術の授業が楽しいことは重要だが、単に楽しむだけではなく、生徒の能力の高さ、感性の鋭さを引き出したい、美術の授業を座学から解放された息抜きだけで済ませたくない、と感じていた。

そこで、美術を通して他の教科の学習にも繋がるような効果的な表現・鑑賞活動を行うため、伝統学校行事「カルタ大会」（百人一首）との連携による教材を考えた。

授業では、百人一首のイメージを絵画などの平面作品で表現する方向で教材研究を進め、主題表現の明確さから、「剪画」という切り絵の表現で作品制作を行うことにした。また、カルタ大会は国語科共催の学校行事でもあるため、生徒に百人一首の暗唱を課している国語科に協力を求め、和歌のイメージをビジュアル化する方法を検討、美術の剪画制作に時期を合わせて国語の授業で和歌の学習に入ってもらった。完成した作品は、カルタ大会に合わせて渡り廊下に展示することにした。

実際の制作では、百人一首に詠まれている場面の描写に、情緒や雰囲気が出るような線や面を加えて配置する方法で絵作りを進めた。恋愛感情や、季節と感情を連動させて詠まれた和歌が多いことから、“感情をどのようにイメージ表現するのか”に焦点をあて、視覚表現における「構成エレメンツの感情表現」を絵作りの導入にとり入れた。また、ワークシートで和歌の解釈や、受け取ったイメージを言語化させながら、意味や制作意図が鑑賞者に伝わる作品になるよう助言を行った。

導入では、風景や動植物の図案に「孤独感」、「躍動感」、「喜怒哀楽」といった感情を点、線、面の形で加えることで、百人一首の絵札から受ける「和風」「古典的」などの既成のイメージに頼るだけでなく、場面を現代に置き換えたり、抽象的な表現にしたりすることも可能になった。

■ 成果と課題

⑴ 成　果

◉　最初、生徒からは「百人一首を絵にするなんて面倒だし難しそう」という声が多かったが、始めてみると、「どうしたらもっと○○な感じが出せるのか」「こうすれば○○な風に見えるのでは？」といった工夫をするのが楽しくなったようである。完成した作品に満足している生徒が多い印象を受けた。

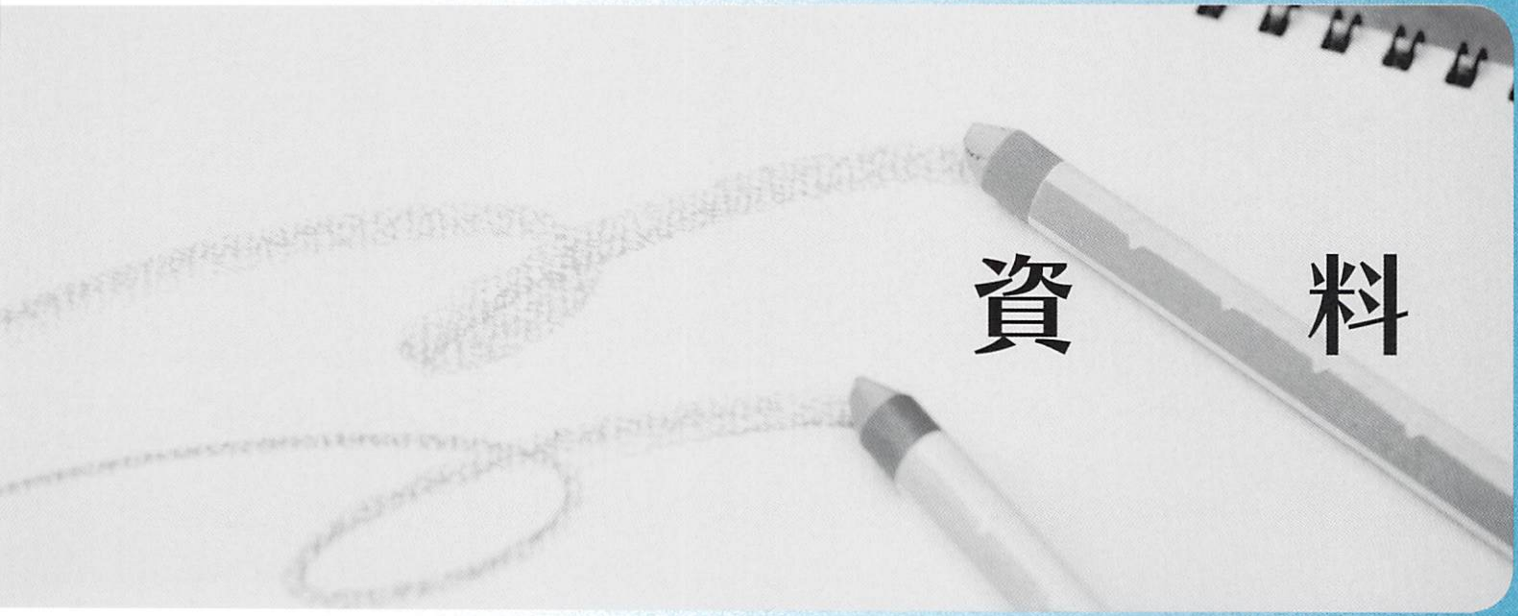
◉　絵作りの導入にとりいれた「構成エレメンツの感情表現」では、同じような図案でも、加えた線や形によって全く印象が変わることがわかり、生徒は和歌から感じ取った「悲しさ」や「楽しさ」、「孤独感」や「静寂感」といったイメージを形にすることで、和歌の意味をより表しやすくなった。

◉　学校行事、国語の授業と並行して行うことにより、美術の授業で和歌の理解を深めたことが、カルタ大会への意欲喚起や、国語の学習効果を上げることへと繋がった。制作後の生徒から、今回の表現・鑑賞活動を通して、改めて和歌に興味関心を持つきっかけとなった、という感想も聞くことができた。また、作品展示を通して、鑑賞した美術を選択していない生徒からも、わずかではあるが反響があった。

⑵ 課　題

◉　剪画の白黒による表現は、光と影による形態把握の端的な表現方法で中間の色調がないため、参考資料や情景写真から受ける色のイメージが整理され、鑑賞する側にも、明確に制作意図が伝わりやすいものとなった。反面、下絵のイメージどおりに白黒に階調を分けることができない生徒や、絵は得意でも、切る作業で失敗してしまう生徒もおり、手だてを考えなければならない。

◉　今回の題材は百人一首としたが、他教科との連携や、生徒の学習意欲、興味関心を考えると、広義に古典和歌や近現代の文学との連携や、社会科の歴史と連携した題材設定の工夫もできるのではないか。



資　料

関東甲信越静地区造形教育研究大会のあゆみ

回	期日	開催地	大会主題
1	昭36.11	東京都 中央区	図画工作科の実践研究発表
2	37.11	山梨県 甲府市	たくましい心を育てる造形教育
3	38. 8	新潟県 高田市	造形教育の現状を確かめ、これからの志向を見出そう
4	39.11	○ 栃木県 宇都宮市	造形教育の実践を通し豊かな個性を育てる
5	40. 8	東京都 台東区	科学と美術教育
6	41. 6	千葉県 千葉市	子どもの調和的な育成を目指す造形教育
7	42.10	○ 新潟県 新潟市	人間形成を目指す造形教育の現実的課題と解決策
8	43.11	茨城県 水戸市	主体的活動を目指す造形教育の推進
9	44.10	群馬県 高崎市	個性豊かな表現活動をねらう造形教育
10	45. 7	埼玉県 浦和市	今後の造形教育の基本的内容とその指導の研究
11	46.10	○ 静岡県 静岡市	たくましい創造力を育てる造形教育
12	47. 6	山梨県 甲府市	造形教育のたしかな授業をめざして
13	48. 6	神奈川県 横浜市	情報化時代における造形教育
14	49. 8	長野県 松本市	人間復活の美術教育
15	50. 6	栃木県 宇都宮市	造形教育における子どもと教師
16	51.11	千葉県 千葉市	造形教育における今日的課題の解明
17	52. 6	茨城県 水戸市	明日をきりひらく子どものための造形教育
18	53.10	○ 埼玉県 浦和市	造形教育の本質にせまる実践はどうあるべきか
19	54.11	群馬県 前橋市	豊かな人間性を育てる造形教育
20	55.11	静岡県 沼津市	創る喜びを確かめる造形教育　〜授業を通してつくる喜びにひたらせよう〜
21	56. 6	○ 新潟県 長岡市	生きているあかしの表現　〜創る喜びのもてる造形学習〜
22	57.10	山梨県 甲府市	創るよろこびを味わう造形教育
23	58.10	神奈川県 横浜市	明日をになう子どもの造形教育
24	59.10	○ 長野県 上山田市	心おどらせて取り組む造形
25	60. 6	東京都 豊島区	素材と創造者たち　〜教育における造形教育の重大性を問う〜
26	61.10	群馬県 桐生市	未来をになう子どもの造形　〜次代に生きる創造の高まりを求めて〜
27	62.10	千葉県 千葉市	子どもの心を掘り起こす造形教育
28	63.10	新潟県 上越市	つくる意欲・感性……今、子どもたちと　〜創造の喜びを育む造形教育〜
29	平元.10	静岡県 浜松市	子どもの感性を研ぐ造形教育　〜自らに素直な表現を求めて〜
30	2.10	茨城県 水戸市	豊かに、人らしく、たくましく
31	3.11	埼玉県 浦和市・川口市	感性を高め創造する力を育む造形教育
32	4.10	山梨県 甲府市	豊かな感性をつくる喜び、生きる力
33	5.10	栃木県 宇都宮市	豊かな心、伸びる個性、ひらく明日
34	6.11	神奈川県 横浜市	いま、さらに　豊かな感性・創造のよろこびを
35	7.11	長野県 飯田市	いのちにあふれる造形活動　〜つくるよろこび 自分らしさの表現を求めて〜
36	8.10	○ 東京都 中野区	人間・表現・環境
37	9.11	群馬県 前橋市	自分らしい造形活動を保障する教師の役割
38	10.11	千葉県 千葉市	自分らしい発見・思いっきり造形
39	11. 8	○ 埼玉県 大宮市・浦和市	自分“彩”発見　〜「自分さがしの旅」をしつづける子どもの造形活動〜
40	12. 8	○ 静岡県 富士市	開く造形教育に　生き生き交流
41	13.11	茨城県 水戸市	つくりだす力　かがやき　いきる感性
42	14.11	新潟県 新潟市	生きる力を培う造形教育 大地と大河と日本海からのメッセージ 〜かかわり 発信 還元 そして 自信へ〜
43	15.10	山梨県 甲府市	「自立への道すじ」　〜豊かに感じ、自分を見つめ、造形に挑む〜
44	16.11	栃木県 宇都宮市・鹿沼市	ハート・ART　〜風かよう夢広場〜
45	17.11	○ 神奈川県 横浜市・川崎市	つくり続けるよろこび、それは生きるよろこび 〜色と形のメッセージ I から WE から〜
46	18.11	○ 長野県 長野市	私っていいな!! “いろ・かたち”　生きあい　学びあい
47	19.11	東京都 文京区	人間形成としての造形・美術教育
48	20.11	群馬県 高崎市	自分らしさ　つくりだす力　いきいき造形
49	21.11	○ 千葉県 千葉市	きらめく感性　ときめく思い　うみだせアート
50	22. 8	静岡県 静岡市	つくりだす喜びを培う造形教育　〜「みる」ことの再考を通して〜
51	23. 8	新潟県 長岡市	つくる喜び みる楽しみ かかわる･つながる造形教育 〜『よさ』が広がる造形活動を求めて〜

○は全国大会併催

関東甲信越静地区造形教育連合規約

1．本連合会は、関東甲信越静地区造形教育連合といい、事務所を理事長所属の所に置く。

2．本連合会は、関東甲信越静地区の造形教育の振興を図り、各都県の親睦連絡を図るを目的とする。

3．本連合会は、東京都、神奈川県、千葉県、茨城県、栃木県、埼玉県、群馬県、山梨県、長野県、新潟県、静岡県下の各学校種別の造形教育団体をもって組織する。

4．本連合会は、その目的を達成するために、次の事業を行う。
(1) 本連合としての研究協議
(2) 各都県間の研究活動の協力助成
(3) 造形教育振興を目的とする他の団体への協力
(4) その他連合が必要と認めた事業

5．本連合会に次の役員を置く。

(1) 理事長	1 名	(2) 副理事長	2 名
(3) 理　事	若干名	(4) 評議員	若干名
(5) 監　事	3 名	(6) 事務局長	1 名

(7) 顧　問（前年度大会委員長または運営委員長）

6．役員の任務は次のとおりとする。
(1) 理事長は本連合を代表し、業務を処理する。
(2) 副理事長は理事長を補佐し、業務の処理にあたる。
(3) 理事は本連合の運営にあたる。
(4) 評議員は理事を補佐し、各都県の研究団体との連絡運営にあたる。
(5) 監事は本連合の会計並びに事業を監査する。

7．役員の選出は次のとおりとする。
(1) 評議員は各都県下の参加団体ごとに４名以内を選出する。
(2) 理事は各都県下の参加団体の代表者をもってあてる。
(3) 理事長・副理事長は理事の互選によって決める。
(4) 監事は理事会において、評議員の中から選出する。

8．役員の任期は１ヶ年とし再選を妨げない。

9．会議は次の二つとする。いずれも出席者の合議によって成立し、理事長がこれを招集する。
(1) 評議員会　　年１回以上
(2) 理事会　　必要に応じて開く

10．本連合の経費は各都県の会費及び分担金、その他の収入をもってあてる。
(1) 会　費　　各都県ごとに年額3,000円・研究大会分担金10,000円

11．本規約の改正は評議員の決議による。

12．本規約についての細則は評議員会の議を経て定める。

本規約は昭和43年４月20日より施行する。
本規約は昭和58年10月27日に改正し同日を以て施行する。
昭和62年６月13日、会費2,000円に改正し同日を以て施行する。
平成１年７月３日、監事３名に改正し同日を以て施行する。
平成２年10月25日、会費3,000円に改正し平成３年度を以て施行する。

第51回大会 運営組織

大会会長	県美連会長	池上秀敏	（上組小学校）
大会副会長	県美連副会長	堀川文章	（新井中学校）
	県美連副会長	野川彰夫	（江南小学校）
	県美連副会長	風巻洋	（阿賀黎明高校）
大会実行委員会	委員長	柴野ひさ子	（葛巻小学校）
	副委員長	小林学	（栃尾東小学校）

研究局

部会、授業推進
基調提案
ワークショップ運営

局長
中嶋均　小国中学校

副局長
丸山実　塩沢中学校

主任
石田邦伸　日越小学校

研究局員
佐藤直人　上越総合高校
佐藤克己　近代美術館
野村宏毅　近代美術館

分科会
P12～13参照

事業局

大会運営・設営
会場・表示等
講演会運営等・分科会運営

局長
佐藤久美子　浦佐小学校

主任
島田洋子　条南小学校

事業局員
村山裕之　津南中学校
小玉純恵　見附第二小学校
寺澤玲子　吉谷小学校
中俣晋　黒条小学校
佐藤昌弘　阪之上小学校
佐々木潤　栖吉小学校
佐藤修　富曽亀小学校

編集局

大会要項・紀要
大会記録・報告
HP運用・情宣等・メディア対応

局長
永井毅人　名木野小学校

主任
下村芳明　名木野小学校

編集局員
橋本徹　今町中学校
西野浩司　旭岡中学校

事務局

大会運営、会計
文書作成・発送等
役員嘱託・実践発表依頼等

局長
金澤健志　上組小学校

主任
長谷川太郎　上組小学校

事務局員
黒井美智子　上組小学校
鰐渕紀美子　上組小学校

高校部
丸山恒典　見附高校

相談役

船岡芳英　小千谷幼稚園
外山和弘　関原中学校

ワークショップ

廃校
斉藤博文　堀之内中学校
恩田康一　寺泊中学校
家老尊則　栃尾南小学校
笠原裕美子　浦佐小学校
榎並明日香　塩沢中学校
霜鳥健二　長岡商業高校
中村信　栃尾高校

美術館
田村敏宏　大島中学校
秋山敏行　西中学校
五十嵐由美子　表町小学校
志田とも子　江陽中学校
井口直子　城内中学校

造形大学
佐藤隆幸　小千谷中学校
吉岡千絵　長岡工業高校
中村幸恵　日越小学校
大塚夕紀　小出中学校
星野敦郎　小千谷中学校

大会事務局

〒940-1142　新潟県長岡市豊詰町227　長岡市立上組小学校内（担当：金澤健志）
MAIL▶18kamigu@kome100.ne.jp　FAX▶0258-22-0960　TEL▶0258-22-0959

編集後記

長岡市では、昭和56年に全国大会と併催して以来の関東甲信越静地区大会となりました。この間、新潟県は、中越大震災・中越沖地震と２度の震災を経験しました。そして、今年の春は、東日本大震災が起こり、被災地はもとよりわが国全体が大きな打撃を受けております。一日も早い復興を願うばかりです。

今、校了を迎え、皆様の玉稿を読み返す時、困難に出会っても決してあきらめずに立ち上がろうとする、たくましく創造力にあふれた人を育てたいと強く思います。また、人間形成における造形教育の重要性を広く知らしめたいという気持ちを新たにしております。

大会紀要の編集に際し、文部科学省をはじめ、関係諸団体の皆様方、そして関東甲信越静地区の造形教育に情熱をもって携わっていただいた諸先生方のご協力とご支援に心よりお礼申し上げます。

（編集局）

第51回 関東甲信越静地区造形教育研究大会 新潟大会
第２８回 新潟県美術教育研究大会 中越大会
第４４回 新潟県中越美術教育研究会 夏期研修会

発行日：平成23年８月４日

発行者：関東甲信越静地区造形教育連合 理事長 髙橋香苗
関東甲信越静地区造形教育研究大会新潟大会 大会会長 池上秀敏
関東甲信越静地区造形教育研究大会新潟大会 実行委員長 柴野ひさ子

事務局：長岡市立上組小学校（大会事務局長：金澤健志）
〒940-1142 新潟県長岡市豊詰町227
TEL／0258-22-0959 FAX／0258-22-0960 MAIL／18kamigu@kome100.ne.jp

印刷：有限会社 めぐみ工房

第51回 関東甲信越静地区造形教育研究大会　新潟大会

2011